

527

16



始





IF4M64

岡本綺堂著

綺堂戲曲集

第貳卷

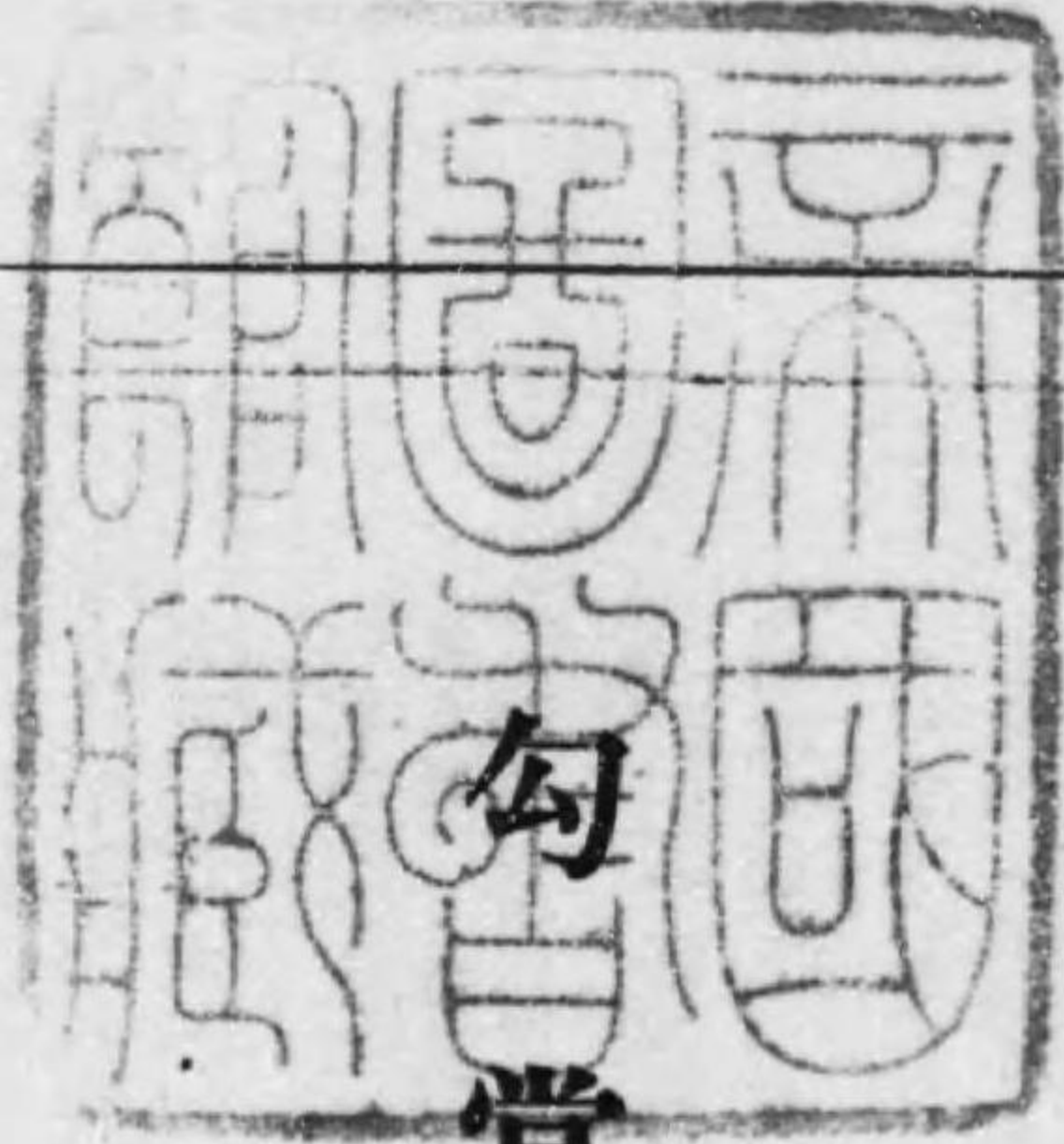
東京春陽堂版

大正
13. 11. 29
廣文

527-16

第二卷目次

○ 勾當内侍	一
○ 雨夜の曲	二元
✓ 貞任宗任	一元
○ 番町皿屋敷	一七五
○ 入鹿の父	二〇五
○ 兩國の秋	二二三
○ 朝飯前	二二三
○ 蟹満寺縁起	二四三
○ 小栗栖の長兵衛	二六九



內侍
勾當



大正七年九月作。
大正七年十月、歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——勾當内侍（中村歌右衛門）瓜生兵庫助（市村羽左衛門）
與右衛門（市川段四郎）梶六（市川猿之助）桔梗（中村福助）小菊（市村龜藏）
など。

大正十一年四月十七日、帝國劇場に於て
攝政宮殿下、英國皇太子殿下、台覽。

その當夜の役割——勾當内侍（歌右衛門）桔梗（福助）兵庫助（澤村宗之助）與
右衛門（市川中車）梶六（片岡市蔵）など。

登場人物——勾當内侍、侍女桔梗、小菊、船頭與右衛門。その梓梶六。瓜生兵庫助、赤
澤源八。ほかに瓜生の家來、赤澤の家來、濱の男女大ぜい。

江州矢走の渡し場。正面は琵琶湖を奥ふかくみせ、上のかたに小さき渡し小屋ありて、小屋の外に
高燈籠をかけたなり。舞臺のまん中と下のかたには松の立木などあり。延元三年七月中旬の夜。
（高師直の家來赤澤源八は家來のひとりに松明を持たせ、ほかに家來二人は長巻を持ちて控へゐる。
渡守の梓梶六は下の方にひざまづく。）

源八。矢走の渡し守はおのれよな。このあたりに都の上臈が忍び居ること存ぜぬか。つゝます申
せ。

梶六。して、その上臈はどなたでござりまするな。

源八。餘人でない。新田左中將義貞が北の臺、勾當の内侍といふ、世にも稀なる容顏美麗の上臈
勾當内侍

が、一三人の腰元どもを召具して、このあたりに隠れ住むとつけたまはり、都よりわざわざ討手にまるつた。かく申すそれがしは高武藏守殿の御内にて、足輕大將の赤澤源八。

梶六。

む、では、山門の戦ひに、お山の猿に嚇されて一番先に逃げたといふ……。

源八。

え、いらぬことをべら／＼申すな。それがしが詮議する勾當の内侍、居るか居らぬか確かに申せ。

(小屋の内より梶六の父奥右衛門出づ。)

奥右。

どなたもお役目御苦勞に存じます。唯今うけたまはりましたる勾當の内侍とやらの御詮議。そのやうなお方はこゝらにいついぞお見受け申したことがござりませぬ。ほかをおたづね下さりませ。

しかと左様か。

源八。

御念には及びませぬ。

奥右。

さりとしてこのまゝに立歸らば、詮議が足らぬとお叱りは知れてある。それがしはこの浦づたひに隣村まで見まはると致さう。萬一それらしき者のすがたを見付けたら、すぐにとより知らせてまゐれ。きつと褒美を取らすぞ。

源八。

二人。

かしこまりました。

源八。

(家來を見かへる。それ、まゐれ。

家來。

はあ。

(源八は家來をひき連れて上の方に入る。奥右衛門親子はあとを見送る。)

梶六。

主人の威光を嵩にきて、臆病武者が威張るわ。威張るわ。(笑ふ。)

奥右。

(おなじく笑ふ。) さうぢや、さうぢや。女の詮議には打つてつけの侍らしいわ。とても戦場の役には立つまい。

梶六。

あんな意氣地無し弱蟲でも、一廉の侍づらをして威張つてゐられる世の中に、權や棒をつかんで眞面目に暮すは馬鹿なことだ。おれもこれから商賣を換へて、そこらの野武士の仲間入りをするか。それとも名ある大將分の家來になつて立身出世を心がけるか。

奥右。

いや、いや、それは悪い料簡ぢや、今時の若い者、そんな考へを起すのも無理ではないが、侍となつて立身出世をするには、どうでも大勢の命を取らねばならぬ。人を殺して出世の種にする。そんな商賣は思つてもおそろしい。これ見やれ。孟蘭盆會の供養にと軒先にかけてある高燈籠。長者の萬燈より貧女の一燈と御佛が説かせられたも此事ぢや。未來の

勾當内侍

闇をも照すといふ、このともしびを力として、後世安樂をねがふが人間の勤めぢや。この世の出世がなんにならうぞ。なむ阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。これ、悴よ。そなたも佛名を唱へぬか。

梶六。

あい、あい。

與右。

なむ阿彌陀佛。

梶六。

南無阿彌陀佛。

(ふたりは燈籠の火を拜む。)

與右。

おゝ、これでよい。ことしは閏のあつたせるか、七月なかばに朝夕はよほど冷えて来た。

梶六。

どれ、内へ這入つて爐の火でも焚付けようか。(小屋に入る。)

梶六。

ほんに薄ら寒くなつて来た。今夜は踊がまだ見えぬなう。

(梶六も小屋の内に入る。水の音。向ふより勾當の内侍は薄絹をかぶり、腰元桔梗に燈籠を持たせて出づ。)

桔梗。

秋の日ももう暮れましたれば、誰も見咎める者はござりますまい。お心置きなくあれまでお越しなされませ。

(桔梗は内侍を案内して、舞臺に來り、内侍は松の根に腰をかける。)

内侍。

踊の群はまだ見えぬか。

桔梗。

濱の盆踊が夜ごと夜ごとに賑はうとやら聞きましたれば、浦の苫屋に朝な夕なに垂れ籠めておはす御身には、せめてもの慰みにもならうかと、御案内申してまゐりましたが、や

がて踊の一群もこれへまゐるでござりませう。

内侍。

都の踊には引きかへて、こゝらの濱の盆踊は鄙びたうちにもおのづからの風流があらう。

それをよそながら見物せうとて、そなたに誘はれて来たれども、世を忍ぶ身のかなしさは、浪の音にも心を置かれて……。

桔梗。

そのお氣づかひには及びませぬ。こゝらの濱人は正直律義のものばかりで、おまへ様のお

ん身の上を薄々知つてゐながらも、知らぬ振りしてをりますれば……。

内侍。

ほんに嬉しい濱人の情。つい眼のさきの都には足利方が時を得て、威勢をふるふ世のなか

に、日かけ者のわれくを庇うてくれる志は涙がこぼれて忝ない。それにつけても左

中將殿は足利勢に追ひ落され、みやこの春をあとに見て北國の雪にさまよひ給ひ、わらは

も都を立退きて堅田の浦にわび住居、浦の苫屋のおき臥しに、解く由もなき黒髪、みだ

勾當内侍

桔梗。

れたる世と云ひながら、妻は夫にひき分かれ、雁のつばさの音づれも絶えなく、勝のきのふ今日、うき世の秋をかこちつゝ、いつまで生きてゐることぞ。

そのお嘆きは御もつともではござりますれど、北國の官方も御運ひらけて、殿には柚山の城へお入りとの噂。やがては近國諸國の敵勢をおひ散らして、都への通路がひらけますれば、すぐにお迎ひのまるるは必定。かうしてお忍びあそばすも、多寡が二月か三月かの御辛抱でござりませう。

内侍。

殿が柚山へお入りのことは妾もかねて聞いたれど、今に迎ひをくださらぬは、軍もはかばかしくない證據ぢや。

桔梗。

はて、もうなんにも仰しやりまするな。あれ、あれ、いつの間にか月が出て、水の面が黄金のやうに輝いてまゐりました。

内侍。

琵琶のみづうみに照る秋の月は、描けるやうな美しさ。物おもふ身もしばしが程は……。(起ち上りて月を見る。)

桔梗。

内侍様には笛をお持ちなされましたか。(錦の袋に入れたる笛を出す。)

内侍。

お宮仕への砌りより身を放さずにつつたるこの笛。こよひの月

を仰ぎながら、これにて一曲ふき澄まさうか。

桔梗。

わたくしも左様存じました。それぞよいお慰みでござりまする。

内侍。

いや慰みには吹くまい。往にし元弘の鎌倉攻めの砌り、左中將どのは稻村ヶ崎にて黄金作りの太刀を龍神にさしつけ、潮の退かんことを祈らせたまふ。その奇特によつて海は干潟となり、北條は遂にほろび終んぬ。女でこそあれ、わらはも左中將殿の妻。つたなき笛にも一心をこめて吹くならば、龍神感應まし／＼て、夫の武運もやがて開け、夫婦めでたくめぐり逢ふ。奇特を見ぬともかぎるまい。月にかやく水の底には八大龍王おはします。辛がつたなき笛のしらべも一生に一度の祈りとときこしめせ。

(内侍は湖にむかひて笛を吹く。水のうへに月明るくなる。小屋の内より與右衛門忍び出で、これも耳を澄まして笛の音を聞きあたるが、やがてあたりを窺ひながら物と聲をかける。)

與右。

もし、お腰元衆。

桔梗。

こなたは渡守どの。(すゝみ寄る。)

與右。

(小聲で)内侍様が一心に吹いてござるところをお邪魔申しては濟まぬことぢやが、たつた今こゝへ都から……。

勾當内侍

桔梗。

え。

與右。

討手は高師直の家來。勾當の内侍のありかを教へたら褒美をやるよ、鶉の目鷹の目で詮議いたして居りましたれば、再びこゝへ引返してまゐらうも知れませぬ。

桔梗。

おゝ、そんならこゝへ高師直の討手が……。

與右。

(空を見る。)生憎に明るい月も出ました。踊を御見物ならばあれへ忍んで……。 (小屋を指さす。)人目に立たぬやうに隙見をなされませ。

桔梗。

ほんにこれは油断がならぬ。そんならそこで些との間……。

與右。

さあ、さあ、御遠慮なくお休みなされませ。

内侍。

(この内侍は笛をやめて二人の話を聞きある。)

内侍。

妾の一心の足らぬしか、笛を調ぶる耳もともに、さやく聲がたしかに聞ゆる。なう、渡守。高師直の家來どもが妾のありかをたづねてゐるとか。

與右。

左様でござりまする。たつた今もこゝへまゐりました。かう申すうちも何やら気がかり。さあ、さあ、早うお忍びなされませ。

内侍。

そんならしばらくそこを借りませうぞ。

與右。

むさくるしうはござりますれど、人の見ぬうちに些とも早う。

(内侍は桔梗と顔を見あはせ、與右衛門に案内されて小屋のうちに入る。桔梗はあとに残りて、心もとなげに左右を見まはしてゐると、小屋の内より梶六忍び出づ。)

梶六。

これ、お腰元衆、これ。

(桔梗の肩をたたく。桔梗おどろきて振向く。)

桔梗。

おゝ、こなたは渡守の息子殿。こよひは思はぬ雑作にあづかりまする。

梶六。

いや、そんな堅い挨拶は扱措いて、これ、お腰元衆。こなたの名は……。

桔梗。

桔梗と云ひまする。

梶六。

さうだ、さうだ。なんでも美しいしをらしい名だと覚えてゐた。そこで桔梗どの。こなた達の隠れ家へおれがたびく尋ねて行つて、このみづうみの生魚を缺かさぬやうにとゞけて遣る。その親切を忘れはせまいな。

桔梗。

そりやもうお前が云はいでも、こなた衆親子の親切は、わたし達ばかりか内侍様も、かねがね喜んでゐられまする。

梶六。

内侍様には喜ばれいでも、この梶六の親切がおまへの胸にひゃけばいゝのだ。

勾當内侍

桔梗。

え。

梶六。

おれはこゝらの濱育ちで、歌も讀まれぬ、文も書けぬが……。

梶六。

(桔梗は小屋の方へ行かうとするを、梶六はひき戻す。)

梶六。

この眼で疾うから知らせてある筈だ。おれは初めておまへを見た時から……。はて、なぜ逃げる。おれの云ふことをまあ終ひまで聞いてくれ。

(桔梗は無言にて拂ひのける。)

梶六。

これ、まだ云ふことがある。これ、桔梗どの……。

梶六。

(桔梗はつんとして小屋のうちに入る。)

あゝ、宮仕へする女はみんな氣位の高いものだ。船頭風情とあなどつて、物も云はずに行つてしまつた。(ぼんやりして腕をくむ) むゝ、さうだ、さうだ。おれもこんな船頭商賣をしてゐればこそ、惚れた女にまで侮られるのだ。よし、おほえてゐろ。おれも立派な侍になつて見せるぞ。

(梶六は一敷に上の方へ走りゆく。小屋の内より奥右衛門はうかひゐて、南無三寶といふ思入にて再び内に入る。盆唄の聲きこゆ。)

唄「琵琶のみづうみ淺瀬を渡る、アリヤサ。戀の深みは渡られぬ。コリヤサ。

(下のかたより濱の男女大勢が踊りながら出づ。)

唄「美濃の柳と近江のやなぎ、アリヤサ。國は遠へど、戀はする。コリヤサ。

(この唄をくり返しながら大勢は輪になつて踊る。このうちに奥右衛門は内侍のかつぎを桔梗にかぶせて連れて出で、踊りの群のうちに突き遣る。又ひと踊りする中に、赤澤源八は家來をつれて出で、踊りのうちの桔梗を見つけて取押へる。踊りの群はおどろきて逃げ去る。桔梗はわざとかつぎを深くして引立てられてゆく。向ふより腰元小菊走り出づ。)

小菊。

内侍様や桔梗どのが戻りの遅いは心かかり。世を忍ぶおん身の上になんぞのあやまちでもなければよいが……。

小菊。

(小菊はあたりをうろく見廻してゐるところへ、小屋の内より奥右衛門は内侍をつれて出づ。)

内侍。

おゝ、内侍様。これにおいでなされました。して、桔梗どのは……。

小菊。

その桔梗はわらはの身代りに……。

奥右。

小菊。

せがれめが訴人に駈け出したと見ましたれば、當座の思案で桔梗どのお身代りにいたし

勾當内侍

ました。

小菊。お。

内侍。おもへば悲しい桔梗の身の上。無慈悲な敵に捕はれて、その行末はどうあらう。

(内侍は思はず上の方へゆきかゝるを、奥右衛門は支へる。)

奥右。それを仰しやつてゐる場合ではござりませぬ。身がはりの替玉が露顯したら、再び引返し

てまるるは必定。この間に早うお落ちなされませ。

小菊。ほんにさうでござりまする。討手が向ひしとあるからは、こゝに長居はなりませぬ。

内侍。さりとて都へもかへられず。

小菊。もう此上は是非がござりませぬ。やはり都へお歸りなされて、天龍寺の上人のお袖にすが

り、一先づ御出家にさまを變へ、おこなひ澄ましておはしますば、流石の高師直もよもや

手ざしはなりませんまい。

奥右。なるほどそれはよい御思案。お悼はしうはござりますれど、その黒髪をお剃りなされて：

……。

内侍。いや、いや、ふたりが折角のすゝめなれど、剃髪などとは思ひもよらぬ。

小菊。そりや御得心はござりませぬか。

内侍。たとひ一時の手だてにもせよ、新田左中將義貞といふ夫ある身が、黒髪をむざと剃落して

なんとならうぞ。女子の命は髪形。あすにも北國の柚山より妾を迎ひにまゐりし時、墨染

姿のそぎ尼で夫に顔が合はされうか。身代りのこと露顯して再び討手が来るならば、命を

捨つるまでのこと。千筋となづる黒髪を命が惜さに切られうか。奥右衛門は兎も角も、小

菊は女子ぢや、察してたもれ。

小菊。(泣く)お察し申上げます。そのお詞をうけたまはるからは、二度と御出家はおすゝめ申

しませぬ。さりとてこゝに留まつて、見すゝ敵の手にかゝるは、あまりと申せばお悼は

しく、桔梗殿の忠節も無になる道理。途中の難儀もあらばあれ、いつそこれから北國へ：

……。

内侍。おゝ、柚山とやらへ案内してたもるか。

小菊。どのやうなところか知りませぬが、わたくしが一生の御奉公、きつとお供をいたします。

奥右。おゝ、よくぞ思ひ立たれました。女子同志の長い旅、さぞ御難儀とは存じますれど、思ひ

立つたら真直に……。小菊どの、道中の御介抱をたのみまするぞ。

勾當内侍

小菊。足弱ふたりが連立つても、毎日おこたらずに歩んだら、おそかれ早かれ目ざすところへ……

奥右。さうきまつたら一刻も早い勝せがれめが訴人して、お宿の方へも討手が廻つてゐようも知れませねば、すぐにこれから御出立なされませ。とは云へ、お二人ともにそのお姿では……先づ先づお待ちなされませ。

(奥右衛門は小屋のうちに入りて、二組の養笠を持ちて出づ。)

奥右。わたくしと伴の養笠が丁度二組揃うてをりますれば、これをお召しく下さりませ。かさねくの志。再び世に出る折もあらば必ず報いをしますぞ。

奥右。その仰せでは痛み入ります。

(奥右衛門は手づたひて内侍と小菊とに養笠をさせる。月暗くなる。)

内侍。そんなら奥右衛門。

小菊。さらばでござりまする。

奥右。お、月が暗くなりました。氣をつけてお出でなされませ。

(内侍と小菊とは向ふへ行きかけて俄にたちどまる。奥右衛門も向ふを見ておどろく。)

奥右。もし、しばらくお待ちなされませ。誰やら向ふから来る様子。

内侍。狐火のやうな松明が、一つならず二つ三つ。

小菊。敵か味方か、その正體の知れるまでは……

奥右。兎もかくもこれへお忍びなされませ。

(奥右衛門はふたりをよび戻して、再び小屋のうちに隠し、自分だけは門口に立ちてうかひある。向ふより瓜生兵庫助は家來二人に大なる唐櫃を肩かせ、家來三人に松明を持たせて出づ。)

兵庫。あの高燈籠をかけたるところに人家ありと覺ゆるぞ。見てまゐれ。

家來。はつ。

(家來のひとり先には立ちて小屋の前に来る。)

家來。こゝは矢走の渡であらうな。

奥右。はい、はい。左様でござりまする。

(このうちに兵庫助も小屋の前に来る。)

兵庫。その方は渡守か。少しくたづねたき次第あり。このわたりには新田殿の北の臺、勾當の内侍が忍んでおはすこと存じてをらぬか。

勾當内侍

與右。

え。(躊躇してゐる。)一向に存じませぬ。

兵庫。

存じて居らぬか。

與右。

はあ。

兵庫。

いや、隠すまい。それがしは新田殿の味方、北國柚山よりはるく上つた者ぢや。

與右。

あの、北國からお上りなされましたか。たしかに左様でござりまするか。

兵庫。

なんで卑怯に詐り云はうぞ。内侍のおん隠れ家を存じて居らば早う申せ。

與右。

はい。

内侍。

(與右衛門はまだ不安らしく躊躇してゐる。小屋のうちより内侍と小菊とは義をわきて出づ。)
わらはを尋ぬるおん身は誰ぢや。

兵庫。

(家來が差付ける松明の火に、ふたりは顔を見合はせる。)

内侍。

お、北の臺にはこれにおはしませしか。絶えて久しき御對面。それがしは瓜生判官保の弟、同苗兵庫助。お見覚えござりませぬか。

小菊。

お、おん身は瓜生兵庫助。まづは堅固で重疊ぢや。

兵庫。

そんならかねて噂に聞きおよぶ、北國柚山の瓜生どのか。

兵庫。

(ひざまづく。)北の臺にも御健勝の御氣色を拜したてまつり、祝着至極に存じあげます。

内侍。

して、このたびは何しに上つてまるつたぞ。なには扱措いて問ひたいは、左中將殿がおん身の上、御別條はおはさぬか。

兵庫。

さあ。

内侍。

三年以前にお別れ申して、おなつかしい殿のおもかけも、ひとり寢の夢に見るばかり、長

兵庫。

の戦場にお寢れもなされぬか。北國の山路にさまようて、お煩ひもなされぬか。これ、兵

兵庫。

はあ。

内侍。

早う聞かしてたらぬか。焦らして物を思はするか。

兵庫。

はあ。

小菊。

内侍様にはお心せきでござりますれば、早う御返事を申されい。これ、兵庫助どの。

内侍。

なにを猶豫、なぜ云はぬ。

兵庫。

はつ。唯今申上げます。

(兵庫助は土に手をつきて落涙す。内侍はそれを見咎める。)

勾當内侍

内侍。

はて心得ぬ兵庫助、夜露をあざむく袖の雲は……。

兵庫。

兵庫助が袖の雲をおん身はなんと見そなはずぞ。

内侍。

え。

兵庫。

當月二日のゆふぐれに、官軍の總大將、新田左中將義貞朝臣は燈明寺へ来てやみく御最

内侍。

え。すりや左中將どには御最期とや。

小菊。

ほんに思へば夢のやうな。

内侍。

して、御最期のありさまは……。

兵庫。

それを申さうとて参りたれ。義貞朝臣御兄弟には、北國勢三萬餘騎を引率してこのたび上洛の途すがら、足羽藤島の庄に取籠りたる足利尾張守高經を攻め落さんと向はせたまふ。敵は二三百騎に足らぬ小勢なれども、必死をきはめて戦ふほどに、七月二日のゆふぐれまで互角の勝負に時うつる。義貞朝臣は燈明寺のまへに控へて、討死手負の實驗しておはしけるが、藤島の防ぎ強くして、味方やゝもすれば追ひ立てらるれば、その加勢として大將みづから鞍に召され、わづかに五十餘騎をしたがへて、畦道つたひに駆けゆく折柄、城方

内侍。

のもの百餘人、喉を横に走り来て、大將のまへに立塞がる。敵はいづれも徒立にて、深田のなかに楯をならべ、鐵を揃へてさんぐに射る。

兵庫。

おゝ。して、味方には弓矢の用意もなかりしか。

無念や味方には一人の射手もなく、楯を持つたる者さへなければ、的になつて射すくめらる。義貞朝臣かくと見そなはして、味方をおめく討たせながら、われ一人逃るゝ法やあると、駿馬に鞭をくれて一文字に、敵のなかへ進ませたまふ。折しも小雨ふり出でて行く手も見えわかぬ入相頭、敵は誰とも知らぬども、流れ來りし白羽の矢は、おん内兜の眞向に……。

内侍。

おゝ。

兵庫。

さしもの大將も急所の痛手に、はや叶はじと思はされけん、抜いたる太刀を左に渡して、みづから首を掻き切りたまへば、したがふ者共もその場を去らず、おんなきからの前にひざまづきて、いづれも腹を切りて重なり伏す。

(云ひかけて兵庫助は再び落涙す。内侍も小菊も涙にくれて聴いてゐる。)

内侍。

さりとて果敢なき御運の末や。味方三萬騎あるなかには、大將の身に代り命に代らんと思

勾當内侍

兵庫。

ふ者も、定めてあまたありつらん、小雨まじりの夕暮とて、敵やら味方やら見えわかず、義貞朝臣ともあるべき者が、主さへ知れぬ流れ矢の的に立つとは何事ぞ。口惜しいとも悲しいとも譬へて云はうやうもない、わらはの胸の苦しさを皆も推量してたもれ。その御無念はわれくも同様、大將が不慮の御最期は、暗夜に燈火をうしなへる心地、ただく悲嘆の涙にくれ申した。ついでには御最期のありさまを北の臺に一通り申上げた、義貞朝臣が着がへのおん鎧をせめては形見とも御覽に入れたく、それがし罷り上つてござりまする。

内侍。

(兵庫助は家來に命じ、昇かせて來りし唐櫃より緋緘しの鎧を取出して、内侍のまへに置く。)

見おほえのある着がへの緋緘し、これが御形見とならうとは……(鎧をかへて泣く。今は歸るに家もなき妾が身の上、せめてはこれにて御回向申さん。(小菊を見かへる。)) なんぞ香爐に換へるものはないか。

小菊。

はあ。

(小菊は奥右衛門のそばへゆきて囁く。奥右衛門は心得て小屋の内に入る。兵庫助は家來どもに指圖して、唐櫃をまん中に持出し、彼の鎧をその上に置き据ゑる。奥右衛門は奥より佛前の香爐

内侍。

(懐中より香包をとり出す。これぞ世にきこえたる蘭奢待の名香。わらはが都にありし時、下

したまはりしを身につけて、大切に秘藏してゐたれども、左中將殿が靈前に供ふる烟とならんとは、今の今まで知らざりし。まことに人の世のはかなさ、泡沫夢幻と説かれたる御佛の教もしみじくと、我身に思ひ知らるゝぞや。いでや、焼香つかまつらん。

(内侍は鎧の前にひざまづき、香爐に香を炙べてうやくしく禮拜す。一同も黙して頭を垂る。)

内侍。

新田左中將義貞朝臣尊靈、頓生菩提。

(時の鐘きいゆ。)

内侍。

湖水にひびく三井寺の鐘の聲、今宵もはや亥の刻か。

(奥右衛門は涙なふきながら進み出づ。)

奥右。

差出がましうはござりますれど、先刻も申上げました通りの次第でござりますれば、御回向相濟みましたる上は……。

内侍。

ほんにこゝに長居はならぬ。

奥右。

都の討手の來ぬうちに……。

勾當内侍

兵庫。

なに、討手とは……。

奥右。

内侍様を詮議の者共、この浦々を詮議最中にござりまする。

兵庫。

さりとは油断のならぬこと。ここに御座あらんは覺束なし、兎もかくも杣山まで御供申さん。ちつとも早うお立あれ。

内侍。

その杣山へはもう行くまい。誰をたづねて北國まで……。

小菊。

そんなら都へお歸りなされて、先刻もおすゝめ申した通り、いよく墨染のお姿に……。

内侍。

いや、都へも歸るまい。

奥右。

して、お前さまの思召は……。

内侍。

北國へも行くまい。都へも歸るまい。わらはのゆく先は……。

小菊。

(内侍はうしろの湖水を指さす。皆々おどろく。)

内侍。

あのみづうみへお前様が……。

兵庫。

夫の最期を聞くからは今はこの世に望みも無し。かなしき形見を朝夕に見つゝ暮して何かせん。殿が形見のおん着長をわが身につけて湖水の底へ……。

兵庫。

おん身を沈めたまふとや。

内侍。

かならず止むるな、邪魔しまいぞ。(鎧を再びかゝへる。おん着長を身につくれば夫と一緒にゆく心。わらはを生きながらその唐櫃に納め、湖水の底へ沈めてたもれ。)

兵庫。

あまりに御悼はしうは存じますれど、今更おとゝめ申すまじ。仰せにまかせて兵庫助。最後の御用をうけたまはらん。

内侍。

小菊、わらはが支度の手傳ひしや。

小菊。

はい。(躊躇してゐる。)

内侍。

早う來やれ。

小菊。

はあ。

兵庫。

(小菊はよんどころなく緋織しの鎧を持ち、家來のひとりも附添ひて、内侍と共に小屋に入る。)

兵庫。

おとゝめ申したきは山々なれど、世にけなけなる御覺悟を妨げ申すは却つて不忠。新田左中將義貞朝臣が北の臺ともあるべき御方は、深き湖水の底に沈んで、永久の住家を求めたまふが、悲しくもまた美しき御最期であらうよ。

源八。

(上のかたより赤澤源八は梶六を先に立て、繩にかゝりたる桔梗を家來ともに引立てさせて出づ。)

源八。

やい、奥右衛門。よくも我々の裏をかき、偽者の女を渡したな。まことの内侍はいづこに

隠した。まつすぐに白状せい。

兵庫。内侍を渡せといふからは、お身達は都の討手よな。それがしは瓜生兵庫助。

源八。さては北國の瓜生の黨が、内侍を迎ひにまゐりしか。

兵庫。迎ひにまゐりしは某ならず、勾當の内侍は今月今宵、八大龍王の迎ひによつて琵琶のみづうみに沈ませたまふ。

源八。や。

兵庫。お身達も武士の情、かならず御最期の邪魔せられな。強ひて兎やかうと遮りたまは、兵庫助がお相手申す。

源八。む。

兵庫。但しは尋常にお引取りくださるか。

源八。(恐れる)それがしも主命もだし難く、これまで證議にまゐりしが、勾當の内侍入水のこと確かに相違ござらぬな。

兵庫。いかで詐り申さうや。京侍はいざ知らず、北國武士に嘘はござらぬ。まだくそれがしを疑ひたまふか。

源八。いや、その誓言をうけたまはるからは、それがしも決して兎かうは申さぬ。さらば此由を主君に言上せん。瓜生どの、おわかれ申すぞ。

梶六。(源八は恐れをなして家來を引連れ、早々に上のかたへ引返して去る。桔梗と梶六はあとに残る。)

梶六。今聞いて居りますれば、内侍様は入水なさるとやら。それはほんたうでござりまするか。

梶六。(奥右衛門はつか／＼寄つて、梶六の襟裳をとる。)

梶六。やい、おのれ。この親を出しぬいて、よくも訴人にゆき居つたな。新田の殿様はこの二日に北國の足羽とやらで討死なされた。

梶六。や。

梶六。お悼はしや内侍様も、おなじ道にと思召され、生きながら湖水に沈ませたまふ。それほど立派なおん方を敵に渡して立身出世、勿體ないとは思はぬか、恐れ多いとは思はぬか。生れぞこなひの罰あたりめ。おのれも内侍様のお供をして、湖水の底へ一緒にゆけ。

梶六。(突き放されて、梶六はじつと思案する。)

梶六。父さん、おれが悪かつた。どうぞ堪忍してください。おれも今までは侍を羨ましいと思つてゐたが、新田殿ほどの大將でも御運がなければ敢なく討死、その奥方はかなしい御最

期。おもへば侍はおそろしい。やつぱり生れついた船頭で、氣樂に一生を送るが仕合せと、今といふ今初めて覺つた。これから料簡を入れかへて屹と眞面目に働くから、今まで

與右。

む。その誓言に嘘はないな。

梶六。

嘘でない、うそでない。おれはやつぱり分相應に濱の女を女房にして、夫婦共稼ぎが身のためだ。桔梗どのも免してくだされ。これ、この通りだ。(手をついてあやまる。)

(梶六は桔梗の繩を解く。)

桔梗。

今聞いてるれば内侍様は、このみづうみに沈ませ給ふとやら。それはまこととござりまするか。して、内侍様はいづこにおはす。お、もしやそこに……。

(桔梗は唐櫃のそばへ駈寄り、小屋のうちより内侍出づ。内侍は緋緘しの鎧をつけてゐる。)

内侍。

あ、これ、桔梗。妾にこゝに居りまするぞ。

桔梗。

あ、そのお姿は……。

内侍。

左中將どのが形見の鎧をわが身につけてゆく心。そなたとも長い馴染であつたが、今が別

桔梗。

れぢや、亡きあとの回向をたのみまするぞ。はあ。(泣く。)

内侍。

先刻龍神に手向けしこの笛。わらはの形見に遣りませうぞ。(笛をわたす。)

桔梗。

底に沈んでゆく時、一曲吹きすまして送つてたもれ。つたなき調べでござりますれど、これが最後の御奉公、精一ばいに勤めまする。(笛を押頂く。)

(小屋より小菊と家來出づ。)

小菊。

桔梗どの。

桔梗。

お、小菊どの、悲しいことになりました。

小菊。

おとめ申すにも申されぬ今宵の仕儀、たゞこの上は後の世の。

桔梗。

御回向申すより外はないか。

(二人は泣く。)

内侍。

その涙が後生の妨げ、もう泣いてたもるまいぞ。これ、兵庫助。わらはを唐櫃に納めたら、その高燈籠の綱にくより、水に沈みゆくを見とゞけて、綱を見事に切つてくりやれ。

勾當内侍

兵庫。

委細承知つかまつる。お支度よろしう候は………。(ひざまづいて唐櫃を指さす。)

(家来どもは立寄つて唐櫃の蓋をあける。内侍行かうとすれば桔梗と小菊は袂にすがる。内侍はふたりの顔なじつと眺め、やがて振拂ひて唐櫃のそばへゆく。月再び明るくなる。)

内侍。

おゝ、陰りし空はまた晴れて、真如の月が……。

(内侍は唐櫃に入る。)

内侍。

いづれもさらばぢや。

皆々。

はあ。(ひざまづく。)

(うすく水の音。内侍は蓋をおろす。奥右衛門と梶六は高燈籠の網をときて、唐櫃にくゝりつけ、家来どもも手傳ひて、うしろの湖水に沈めにかゝる。兵庫助は綱をきる心にて太刀をぬき放し、片手にて拜む。桔梗は彼の笛をふく。小菊はひざまづきて合掌す。本釣鐘、うすく水の音、笛の聲。)

幕

雨夜の曲

大正二年八月作。

大正八年七月。新富座初演。

初演當時の主なる役割——金井長門守景家（市川中車）金井小太郎景正（市川左團次）お園（市川松蔭）輶繪太夫（坂東秀調）逢坂太夫（中村芝鶴）景安（市川壽美藏）時國（市村龜藏）堺の大盡（片岡市藏）西念（市川左升）など。

登場人物——金井長門守景家、金井小太郎景正。その妹お園、景家の弟子又七、十藏、景安。島原の輶繪太夫、逢坂太夫、丹波大納言の子息時國、桐屋伊兵衛、僧西念、堺の大盡。蒲間佐五右衛門。臼の傳七。梵天長右衛門。犬の七兵衛、ほかに盲法師、傀儡師、田樂茶屋の女、あみ笠茶屋の女、たなばたの笹賣、黒木賣、辻占賣、夜泣うどん屋、祇園まゐりの男、女、娘、旅人、十夜まゐりの娘、老女、仲居、禿、小坊主、小兒、往來の男女など。

第一幕

(一)

洛中祇園の二軒茶屋。二重家體の店にて、外にも床几二三脚をならべたり。店につける下のかた

は料理場のこゝろにて、赤前垂の女二人がしきりに豆腐を切る音、トント、トント、トントと調子付きてきこゆ。上のかたの奥には祇園の社の樓門みゆ。

(明暦年間の秋のはじめ、時は午下り。三十前後の女房が七八歳の娘をつれ、店に腰をかけてゐる。娘は色紙をつけたる笹の枝を持つ。上のかたよりは祇園参詣の旅人二人出づ。つゞいて京のむすめ三人打連れて出づ。下の方より僧一人出づ。つゞいて黒木賣の女二人出づ。これ等の人々はゆき違ひて過ぐ。赤前垂の女二人は店口にたちて人を呼んでゐる。)

女。お休みなされ、お休みなされ。お這入りなさらんか。お支度なさらんか。

(下の方より笹をうる商人出づ。)

商人。笹は要らんか。たなばたの笹はいらんかな。

女。お休みなされ、お這入りなさらんか。

商人。笹は要らんか。

(商人はよびながら過ぐ。上のかたより男と女の二人連れまた出づ。下の方よりは頸に箱をかけた傀儡師出づ。そのあとより小兒二三人ついて来る。傀儡師は店さきに立つ。)

傀儡師。さあ、さあ。これからは義経辨慶五條の橋ぢや。

女。通らんせ。通らんせ。

(傀儡師は去る。小兒もそのあとを追うて去る。男と女の二人づれも去る。)

女。お休みなさらんか。お休みなさらんか。

(豆腐を切る音トントトント。最前より休みぬたる女房は娘と共にたち上る。)

女房。もし、もし、勘定しますぞ。

女甲。あい、あい、ありがたうござります。

(女房は盆の上に錢をおく。)

女乙。おゝ、たなばたの笹をお求めでござりましたか。

女房。子供のくせになんでも人真似をしたがつて困ります。 (娘を見かへりて。) さあ来や。

娘。あい、あい。

女。お静においでなされませ。

(女房と娘は去る。茶屋女二人は顔を見あはせる。)

女甲。けふはお天気がよいせるか、朝から御参詣の絶え間がないので、ほんにくほつとしてしまつた。

女乙。

七夕たなばたにこのやうな天気てんきも珍めづらしいことぢや。これでは今夜こんやは銀河あまのがはが拜まがめるであらうな。

女丙。

(ふたりは店みせに腰こしをかけてゐる。豆腐とうふを切りぬたる女二人おんなふたりも、赤前あかま垂たれて手てをふきながら出いて来る。)

女丁。

七月なつづきになつても、日ひのなかはまだく暑あついことぢやなう。

(袂たもとにて額ひたひの汗あせなどふいてゐる。上かみのかたの奥おくにて觀世物みせものの鳴物なりものきこゆ。)

女丙。

おゝ、丁度ちやうど幸さいひぢや。お客きゃくのゐない間ひまをみて、あの觀世物みせものをちよつと覗のぞいて來こようではな

いか。

女甲。

丹波たんばの山奥やまおくで生捕いけぞつたといふ鬼おにの子こであらう。

女乙。

わたしも昨日きのうみて來たが、評判ひやうばんほどでもないものぢや。

女丁。

と云いうても、一度いちどは見みておきたい。(丙へいの女おんなにむかひて。)お前まへ、行いかうではないか。

(丙へいと丁ていのふたりは行いきかゝる。甲かと乙おつとは遮さへる。)

女甲。

見みにゆきたくば夜よにしなされ。日ひのうちうちに店みせをあけては吐はらるゝぞ。

女乙。

お前まへ方がたが出でたあとあとに、お客きゃくが見みえたらどうしなさる。

女丙。

はて、意地いぢのわるい。すぐすぐに戻もどつて來くるといふに……。

女甲。

では、親方おやがたに断ことわつて行いきなされ。

女丁。

えゝ、面倒めんどうな。ちよつとの間まぢや。

(丙へいと丁ていは止とめる甲か乙おつをつきのけて、上かみのかたへ走はしりゆく。觀世物みせものの鳴物なりものつゞけてきこゆ。乙おつは二人ふたりのあとを見送みおくる。)

女乙。

評判ひやうばんほどでないいと云いふたものゝ、あの人ひとたちが行いくならば、わたしももう一度いちど行いつてみた

いやうな氣きもするが……。

女甲。

えゝ、阿房あほうらしい。揃そろひもそろつて店みせを留と守まもりしてどうする氣きぢや。それ、さういふうち

にも人ひとが通とほる。(上かみの方かたを指ゆびさして。)早はやう呼よびなされ。

女乙。

お寄よりなされませ。お這は入りなさらんか。

女甲。

おやすみなさらんか。

(二人ふたりは聲こゑをそろへて呼よぶ。上かみの方かたより堺さかひの大盡だいじん、その當時たうじの交易商かうぎしやう。寛濶くわんくわつなるいでたちにて編あみ笠がさをかぶり、幫間たいこま佐五右衛門さごゑもんをつれて出いづ。)

大盡。

祇園ぎんの祭まつりは先月せんげつ濟ひつんだが、こゝらは相變あひかはらず販ばんはふことぢやなう。

佐五右衛門。

京きやうの名所めいしよのうちでも指折ゆびせりの祇園ぎんのお社やしろ、一年中いちねんちゆうこの通とほりの繁昌はんじやうでござりまする。

女。 お這入りなさらんか。およりなさらんか。

大 盡。 どこへ行つても赤前垂の女子どもが燕のやうに囀つて、さうぐいしいことぢや。

佐五右衛門。 こゝは京でも評判の高い、祇園豆腐の二軒茶屋。ちよつとこゝでお休みなされませ。

大 盡。 京へのほつてから田樂豆腐も食ひ飽いた。鴨川べりの涼しいところへ行つて飲むとしよう

ではないか。

佐五右衛門。 仰せ御もつともではござりますが、こゝで例の者共にちよつとお目見得をさせたい存

じますから、御窮屈でも先づ先づ……。

(大盡はうなづきて店に腰をかける。)

佐五右衛門。 それ、お大盡様の御立寄りぢや。氣をつけて御給仕をせねばならぬぞ。

女。 さあ、すつと奥へお通りくださりませ。

佐五右衛門。 いや、こゝでよい。ちつとの間、こゝを借りるだけのことぢや。

(女どもは茶を汲んで出す。佐五右衛門は紙入より銀を出してやる。)

佐五右衛門。 これは大盡様から下さるゝのぢや。お禮をいへ。お禮を云へ。

女。 どうもありがとうございました。

(二人は禮をいふ。大盡は鷹揚にうなづきて、更に佐五右衛門をまれば、佐五右衛門は恐るゝ進み寄る。大盡は扇をひらきて耳に口を寄すれば、佐五右衛門うなづく。)

佐五右衛門。 はい、はい、心得てをりまする。(女どもに對ひ。)これ、これ、今少しこつちに密談があ

るほどに、お前達はしばらく奥へ遠慮してくれまいか。店はわしが屹と張番してゐるから、

大丈夫ぢや。

女 甲。 あい、あい。御用があつたらお手を鳴らしてくださいませ。

(女ふたりは會釋して奥に入る、大盡は始めて笠をぬぐ。)

大 盡。 どうぢや、佐五右衛門。 例の奴等は遅いことぢやな。たしかにこゝで適合ふ手筈になつて

ゐるのか。

佐五右衛門。 手筈は萬々整うてをりまする。

大 盡。 久しぶりの京見物、ちつとは金も遣つて見たさに、貴様たちを供につれて、先月のはじめ

から島原に通ひつめ、逢坂太夫に魂を打込んで、さりとて情の強い太夫め。流れ

にうかぶ水草のやうに、寄るかともえて寄りもせず、人を悶らすにも程があるわ。

佐五右衛門。 はて、そこが御辛抱……。右のものを左へ遣るやうに安々と埒があいては、張も意氣地

もござりませぬ。張のない太夫を買ふのは骨のない奴を買ふやうなもので、子供衆のおなぐさみにもなりませぬ。敵に取つて強からざれば、味方にしても頼もしからずと、それ、河原の太平記読みも申しまするわ。はゝゝゝゝ。

大 盡。

その太平記の講釋も聞き飽いた。われ等はいつても千劍攻めの鎌倉勢で、負軍ばかり續くわ、つゞくわ。それも畢竟、あの丹波の時とかいふ青公家めがあればこそぢや。なんほ都ぢやと云うて廓は格別、位倒れの公家ばらに幅をされては、どうでも男の意地が立たぬ。この上は力づくでも彼の時とかいふ奴を押退けて、太夫をわが物にせねばならぬぞ。

佐五右衛門。その駆引はわたくしが……。 (胸をたたく) 一切呑み込んでをりまする。

大 盡。 よいか。

佐五右衛門。よろしうござりまする。

大 盡。 受合ふたか。

佐五右衛門。受合ひました。

大 盡。 それにしても奴等は遅いな。

佐五右衛門。はて、悠長な奴等……。まさかに親子兄弟と水さかづきして來るほどのことでもあるま

いに……。では、しばらくお待ちなされませ。わたくしが鳥渡そこまで行つて見てまゐりまする。

(佐五右衛門は手ぬぐひを取つて鉢まきし、片肌ぬいて駆け出さんとしたるが、たちまち向ふを見て叫ぶ。)

佐五右衛門。おゝ、來た、來た。お大盡のお待兼ぢや。早う來い、來いやい。(扇をあげて差招きしが、又こなたにむかひて口早に云ふ。)もし、まゐりました。(また向ふを見て。)おうい、おうい、來いやい。

(土地のあぶれ者、梵天長右衛門。月代ののびたる頭、紺の布子に天雲絨の半襟をかけ、釘ぬきの紋を金糸にて附け、大小を貫の木ざしにして跣足なり。つゞいて白の傳七。坊主あたまにて頬髭をつけ、鎖帷子のうへに中形の浴衣を着し、大小をおびて高下駄をはく。そのあとより犬の七兵衛は奴頭、生麻へ黒にて放れ駒をかきたる帷子をきて、熊の皮の雪踏をはき、大小に小手懸當をむすび付けて肩にかける。この三人が大手を振つてあゆみ來れば、佐五右衛門は待ちかゝれて呼ぶ。)

佐五右衛門。えゝ、揃ひも揃うて氣の長いことぢや。よくもそれで人並におふくろの腹から十月目に生れたなう。さあ、お大盡がさつきから首をのばして待つてござるのぢや。一人一人にこゝ

れへ出てお目通りをしたがよい。

長右衛門。あい、あい。ようござります。

(長右衛門は眞先にすゝみ出づ。)

長右衛門。これは梵天の長右衛門と申して、年は積つて三十一。これまで喧嘩に逢ふこと五十九度、一度も不覺の名を取つたことはござり申さぬ。

大 盡。では、今度で丁度六十度目ぢやな。なにさま見るから逞しい、強さうな男ぢや。

(傳七はつゞいて進み出づ。)

傳 七。これは大佛餅の大白を軽々と手玉にとつて、雲の上までその名の響いたる、白の傳七と申す男。額に三寸六分の刀疵、これにて手並はお察しくだされ。

(七兵衛もつゞいて進み出づ。)

七兵衛。これは東山の麓にて、やま犬十匹毆殺して、二匹までも生で食つたる名代の荒者、犬の七兵衛とは身共がござります。

大 盡。いや、面白い、面白い。

佐五右衛門。もし、どうぞござります。この三人を味方にたのめば、瘦公家などと張合ふのは、朝

茶の子でござりませうが……。

大 盡。よい、よい。何奴もみんな氣に入つた。では、味方に頼むしに、いつもの茶屋へ行つて、めい／＼に杯取らさう。

佐五右衛門。それはありがたい事でございます。では、みんなも一緒に來やれ。

三 人。あい、あい。

大 盡。このやうな頼もしい味方が殖えたので、わしも肩身が廣うなつた。

(云ひつゝ懐中より小判幾枚をとり出して渡せば、佐五右衛門は扇にのせて三人の前に出す。)

大 盡。それはほんの近づきの印ぢや。あとは又かさねて……。な、判つたか。

佐五右衛門。判つたか。

三 人。ありがたうござります。

大 盡。さあ、來やれ、來やれ。

(大盡は先に立ち、佐五右衛門、長右衛門、傳七、七兵衛等もつゞいて下の方へあゆみ去る。上のかたより仲居お春出て、人々のあとを見送りしが、やがて又、上の方にむかひて小手招きすれば、丹波大納言の子息次郎時國、廿一二歳のわかき公家。鳥原の逢坂太夫、十八九歳の遊女。禿千彌と

三人にて出づ。

時國。堺の客とかいふ男は、もう行んだか。

お春。あれ、もう彼地へ行つてしまひました。

時國。なんぢや知らぬが、辨慶や熊坂のやうな強さうな男どもが、大勢附いてゐるなう。

逢坂。はて、誰がゐるやうとも、わたしが斯うしてお傍についてゐれば、お前に怯を取らすやうなことは爲せますまい。まあ、安心してゐなさんせ。

時國。とは云ふものゝ、力づくばかりでなく、金づくでも私はかなはぬ。もしも和女をあつちへ取らるゝやうなことがあつたら、どうしたものであらうか喃。それを思ふとこの頃は夜も目も寝られぬ。太夫、察してたもれ。

逢坂。はて、氣の弱い、その時には又どうなと工夫がありさうなもの。轉ばぬ先の杖とはいへど、取越苦勞を爲過して、からだを痛めて下さんな。

お春。ほんに太夫さんの仰しやる通り、とかくに苦勞はお身の毒でござります。

時國。太夫。どのやうな風が吹いて來ても、あの堺の客に靡いてはならぬぞよ。大丈夫でござんす。

逢坂。

時國。よいかや。

逢坂。あい。

(下のかたより桐屋伊兵衛出づ。店さきを通り過ぎんとして見かへる。)

伊兵衛。お、若殿様でござりましたか。

時國。伊兵衛か。(少しく慌てる。)
これ、こゝでは何にも云ふまいぞ。

(眼で知らずれば、伊兵衛は首肯。)

伊兵衛。はい、はい。それは心得てをりますが、もし、こゝでお目にかつたのは丁度幸ひ、少々お話し申上げたい儀がござりまするが……。

(太夫のまへを憚りながら云へば、お春は逢坂太夫の顔をみる。)

お春。時様はこなたと何か御用談のある御様子……。わたしは先へ戻りますぞえ。

逢坂。ほんにさうぢや。では、時様。わたしは先へ戻りますぞえ。

時國。さうぢや。こゝらに何時までもうろついてゐて、今の徒に見つけられると又面倒ぢや。わしはあとから行くほどに、廓へ戻つて待つてゐや。

千彌。では、時様。すぐにあとからお出でなさんせ。

時國。お、屹とゆく。

お春。では、御免くださりませ。

(逢坂太夫、千彌、お春は下のかたへ去る。)

時國。これ、伊兵衛。苦しくない。こゝへ掛けたらどうぢやな。

伊兵衛。はい。(會釋して床几に腰をかける。)ほかのことでもござりませぬが、いつぞやわたくしが御媒介して、大津の町人から御用達しました金百兩。あれは後の月でもう期限が切れてをりまするが……。

時國。

それは決して忘れはせぬ。わしもどうせうか斯うせうかと胸を痛めてゐるのぢやが、知つての通り、わしの家もあり裕では無し、殊にわしはまだ部屋すみの身の上ぢや。金の工面と云ふたらなか／＼思ふに任せぬのでなう。察しておくりやれ。

伊兵衛。

今日は太夫を連れてどこへお出でなされました。

時國。

この祇園へ参詣に來たのぢや。

伊兵衛。

太夫を連れて遊ぶお金はありながら、借りたお金はそのまゝでござりまするか。

時國。

え。

伊兵衛。

さあ、そんな野暮を申したところで致方もござりませぬ。就きましてはその貸方の申しまするには、もしどうでも御都合が悪いならば、證文は唯でお返し申してもよい。

時國。

え。

伊兵衛。

併しそれには些と折入つてお願いがござりまする。その貸方の男は金井長門守の作つた琴を、日頃から望んでをりまする。

時國。

お、金井長門守景家は禁裏のお琴師で、天下一を許された名譽の者ぢや。

伊兵衛。

仰せの通り、家柄も權式もある天下一のお琴師でござりますれば、町人風情がいかやうに頼みましても、とても承知は致しませぬ。わたくしも桐屋渡世で、たび／＼出入をして居りまするが、名人の上に氣位の高かい景家殿、どのやうに金を積んでみせたとして、所詮無駄とは最初から知れてをりまする。

時國。

お、判つた、わかつた。もう諄ういふには及ばぬ。町人のたのみは背かぬによつて、公家の私から手をまはして、景家に頼んでくれと云ふのか。大方さうであらう。それで百兩の帳を消してくるゝなら易いことぢや。よい、よい。わしが引受けて頼んで遣らう。

伊兵衛。

では、御引受け下さりまするか。しかしお公家衆の御口添へでも、町人の道具と知れまし

たら……。

時國。ぢやによつて、町人から頼まれたことなどふつつりとも云はいで、どこまでも私のものぢやと云うて頼めばよい。なんとさうではないか。

伊兵衛。さうでござりますとも……。では、きつと御引受け下さりまするな。

時國。大丈夫ぢや。(胸をたたく)その代りに景家の琴が出来次第に、百兩の證文は戻して来る、であらうな。

伊兵衛。承知して居りまする。

時國。やれ、やれ。それでおちついた。では、あしたにも早々たのんで遣はずぞ。(起ち上る)用事といふのはそれぎりであらう。伊兵衛、さらばぢや。

伊兵衛。はて、忙しない。どこへお出でなされます。

時國。そちにも似合はぬ不粹を申すな。わしは待たるゝ身でないか。

伊兵衛。なるほど。(膝を打つて)では、すぐに島原へ……。

時國。お、心は疾うから飛んでるのぢや。

(時國は早々に下のかたへ去る。伊兵衛は呆れてあとを見送る。)

伊兵衛。あまり安受合でなんだか不安心のやうでもあるが……根が正直なお人ぢや。まさかに一時

逃れの嘘でもあるまい。(思案して)なにしろ、茶でも一杯のんで行かうか。

(伊兵衛は手をたたく。奥より甲乙の女出づ。)

女甲。お、先のお客はいつの間にかお歸りなされた。

伊兵衛。店をあげて何をしてるのぢや。早く茶でも湯でも一杯くれぬか。

女乙。田樂は如何でござります。

伊兵衛。お、ついでに豆腐も食つて行かうか。

女甲。あい、あい。

(甲は茶を汲んで来る。乙は田樂を焼きにかゝる。上のかたより金井小太郎景正、廿二三歳、色紙をつけたる笹の枝を持ち出て、店のさきを通り過ぎんとす。伊兵衛よび止める。)

伊兵衛。あ、もし、もし。

景正。お、伊兵衛どのか。こなたも祇園参詣かな。

伊兵衛。なんと強い信心者でござりませうが……はムムムム。時に昨日はわたくしの宅へおたづね下されたさうでござりますが、生憎に留守で失禮をいたしました。

景正。

實は商賣用のことで鳥渡おたづね申したが……。(床几に腰をかける。) どうぢや、伊兵衛殿、よい木地はないか。

伊兵衛。

左様でござりますなう。並大抵の品ではおまへ様の御氣には入りますまい。(かんがへる。) 兎もかくも問屋へまゐりまして、早速聞きあはせて見ませうから、一兩日お待ちくださりませぬか。

景正。

さる方より頼まれて念入りの細工にかゝる筈であれば、値はなにほどでも厭はぬ。木地のよいのを選んでくりやれ。して、その細工は一日も早く取りかゝりたいと思つて居れば、なるべく急いでたのみますぞ。

伊兵衛。

かしこまりました。では、明日にも早速御覽に入れるといたしませう。(景正うなづく。) 時に親御様は、このごろお忙しいやうでござりまするか。

景正。

いや、別に急ぐやうな御細工もない筈ぢやが……。父上になんぞ用かな。

伊兵衛。

いえ。さういふ譯でもござりませぬが、唯今こゝで丹波の大納言様御子息にお目にかゝりましたら、なにかお琴のお誂へがあるとか承はりました。

景正。

時國殿が琴のおあつらへとは珍らしいことぢやなう。(打笑む。) 彼の御人もこのごろは廊へ

足近く通はるゝといふ噂ぢやが……。

伊兵衛。

時様といふ隠し名で、廊の者にも大分知られて居るやうでござります。いや、さういふおまへ様も此頃はなかく御全盛のやうに聞いてをりますぞ。お羨ましいこととござりますな。あ。はゝゝゝ。

景正。

羨まるゝ程のことでもないが……。(打笑む。) 伊兵衛どの、遊びは面白いものでござる喃。

伊兵衛。

面白ければこそ誰も彼も有頂天になるのでござります。今日ももう暮れかゝる。大方これから……。(下のかたを指す。) 御參詣でござりませうな。

(景正はうなづきて、笑ひながら笹を見せる。)

伊兵衛。

ほんに今夜はたなばたでござりますな。

景正。

星も一年に一度は逢ふのぢや。

伊兵衛。

一年に一度どころか、毎晩のやうにしげくお逢ひなされては、お身の毒でござりませうぞ。(笑ふ。)

景正。

(笑ふ。) はゝ、お身にも似合はぬ野暮をいふな。では、木地をたのみましたぞ。

伊兵衛。

はい、はい。

雨夜の曲

伊兵衛。

もし、もし、あまり急いで轉ばぬやうに氣をおつけなされませ。

(景正は笑ひながら下のかたへ去る。伊兵衛はあとを見送る。)

伊兵衛。

いや、若い人達といふものは、どれもこれもみんな面白さうぢやな。お、話に浮かれて忘れてゐた。おい、姐さん。まだ田樂は出来ぬかな。

女 甲。

あい、あい。唯今すぐに出来ます。

(女は田樂を皿に入れて持つて出づ。)

女 甲。

どうも御待遠さまでござりました。

伊兵衛。

よし、よし。ついでに茶を替へて来てくだされ。

女 甲。

あい、あい。

(女は土瓶を持つてゆく。伊兵衛は田樂の串を把りて食はんとす。)

伊兵衛。

熱ッ……。思ひ切つて焦したなう。

(伊兵衛はふところより紙を出して、口のはとりを拭く。女共も笑ふ。觀世物の鳴物又きこゆ。)

(11)

鳥原の出口。正面少しく上のかたに寄せて屋根附の門あり。左右は黒き塀にて、上のかたには青竹の埦を結ひたる出口の柳あり。門のうちには廊の灯見ゆ。下のかたには屋根つきの小さき茶屋ありて、軒にも壁にも編笠をかけたなり。

(茶屋の店には若き女ひとり、腰をかけてゐる。廊通ひの男二人來りて店に立てば、女は笠を取つて渡す。二人は笠をかぶりて門内に入る。これとゆき違ひに、門内よりは三味線を呑負ひたる盲法師出で、茶屋のまへに來かゝる。)

女。

今夜は大層早うござんすな。

法師。

お、おはる殿か。今夜は七夕で廊も大分賑はふやうぢやの。

女。

では、澤山稼いで早く歸るのでござんすな。

法師。

まあ、まあ。そんなものぢや。は、は、は。實は今までの角屋に呼ばれてゐたが、大夫と客との仲のよさ……。なんほ眼のみえぬ私ぢやとて、兎もかくも人を前に置いて、あんまり遠慮がなさ過ぎるわ。

女。して、その太夫さんは……。

法師。輶繪太夫どのぢや。

女。おゝ、そんならお客はいつもの景様であらう。

法師。さうぢや、さうぢや。なんでも景……清……で無し、景……正とか云ふ、琴を作る人ぢや。

女。はて、お前のやうでもない。お琴師の景家殿といへば天下第一の名人、その息子殿の景正と

いふ若いお人ぢや。

法師。なるほど、景家殿の息子殿か。とにかく太夫とはよほど睦まじいやうであつたぞ。

女。それは廓でも評判で、誰知らぬ者もござんせぬ。

法師。してみると、眼の見えぬものは耳までも疎いかなう。はゝゝゝ。では、またあすの晩逢

ひませう。

女。氣をつけて行きなさんせ。

（法師は杖をついて去る。向ふより景家の弟子又七、十藏のふたりは少しく酒に酔ひたる體にて、

おなじく弟子の景安を無理に引張つて来る。）

又七。さあ、こゝまで来て歸るといふことがあるものか。まあ、兎も角もあすこまで歩んだ、あ

ゆんだ。

景安。いや、わしはもう歸りたい。どうぞ堪忍してください。

十藏。はて、情の剛い男ぢや。まあ、だまされたと思つて一度行つて見なされ。

景安。でも、あまり遅うなつてはお師匠様に叱られる。わしは先へ戻ります。

又七。今時の若いものが附合を知らぬと云ふことがあるものか。わし等とても遊ぶのではない。

たゞ素見いて歸るばかりぢや。

景安。それでも私は……。

十藏。えゝ。そんなことを云はずに、まあ一緒にあゆんで來なされ。

（ふたりは嫌がる景安を無理に引張つて来る。）

又七。それ、こゝが出口の編笠茶屋といふのぢや。

十藏。笠を三つ頼みます。

女。あい、あい。

（女は壁にかけたる編笠を取りにゆく。二人は景安を押へてゐる。門のうちには小唄の聲きこゆ。）
唄「起請誓紙をなぜ書かしやんす、戀はふたりの胸にかく。」

又七、

あれ、どうぢや。あゝいふ唄を聴いては歸れまいが……。
(女はあみ笠を持って出づ。)

十藏、

景安、

さあ、門に這入るにはこれをかぶつて行くものぢや。
いや、いや、そんなものはいりませぬ。

唄「立つる錦木甲斐なく朽ちて、あはで年ふる身の辛さ。」
(景安は逃げてゆかんとするを、二人は無理におさへて編笠をかぶらせる。この争ひのうちに上のかたより梵天長右衛門、白の傳七、犬の七兵衛の三人出て来り、つかつかと寄つて景安の笠をのぞく。景安等は薄気味わるき體にてあとへ退る。長右衛門等は人違ひだといふ心にてうなづき合ひ、更に門の内をうかゞふ。夜泣鯉鮓を賣る男、行燈のつきたる荷をかつぎて門内より出でゆく。)

唄「廊の出口に朝顔うゑて、からみ止めたやさらば垣。」
(門内より小太郎景正はあみ笠をかぶり出づ。長右衛門は衝と寄つて笠を覗く。景正は顔をもむける。傳七も七兵衛もかはるゝ寄つて笠をのぞき、これも人違ひだとさゝやき合ふ。門内より頼繪太夫、廿歳。禿生野を連れて出づ。生野は走りゆきて景正の袂にすがる。景正は笠をとる。頼繪太夫は措寄つて無言にて男の笠に手をかけ、茶屋の行燈の火かけに顔を見あはせて別れを惜む。大

きな提灯をつけたる辻占賣の男、ぞめきの客三四人、門内より出でゆく。門内より次郎時國は逢坂太夫と禿千彌に送られて出づ。長右衛門は進んでその笠をのぞき、傳七と七兵衛を見かへりてこれだと知らずれば、傳七は先づ進んで時國の胸ぐらを取らんとし、時國よろめく。逢坂太夫あわて、遮る。)

唄「連れて退いてと頼まれながら、西へ行こや東やら。」

(長右衛門等は進んで時國を打たんとするを、逢坂太夫と千彌は遮るに、流石に手あらくも突き退けられて、三人は持てあましてゐる。景正は頼繪太夫に笠をひかれながら、下のかたへ行かんとしてこの間へ割つて入る。傳七は邪魔だといふ體にて、景正をつき退くれば、笠は太夫の手をはなれて景正は下の方へよろめき行く。この時、景安は笠をかぶりしまゝ進み出でて景正の顔をすかし視る。景正は顔をそむけて行かんとすれば、茶屋の女出づ。)

もし、お笠を……。

女、

おゝ。

景正、
(あみ笠を女にわたす。これと同時に、時國は笠をかたむけしまゝ、摺りぬけて行かんとす。又七と十藏は門内へ入らんとして長右衛門等に突きあたる。長右衛門と傳七はふたりを突き倒す。その隙をみて時國は東の花道へ走りゆく。七兵衛追はんとするを逢坂太夫は隔てる。景正は本花道の方へ

急ぎゆく。朝繪太夫と景安は見送る。騒ぎ唄の三味線さしゆく。

—幕—

第二幕

(一)

洛中室町頭、琴師金井長門守の家。まへに張出したる屋體の上のかたには竹窓あり。窓の外は庭のこゝろにて石燈籠及び立木あり。正面は壁にて、中央に暖簾をかけたる出入口あり。下のかたの壁には絲をかけたる琴二三面を立てたり。屋體の下のかたは一枚瓦の庇をふきたる土塀にて、其中央におなじく瓦庇の入口あり。入口には白き暖簾をさげ、暖簾の中央には『御琴師』下の方には『金井長門守藤原景家』と黒く記したり。門には一本の柳あり。下のかたは奥へかけて町家を見る。

(九月 中旬の午後。景家の弟子又七、十蔵の二人は火鉢をかこみて語る。)

又七。なんだか今日も空模様がかしいなう。十三夜が過ぎると、朝晩はめつきりと冷えて来るやうぢや。

十蔵。やがて來月になると北山時雨といふのが折々に降つて來て、だん／＼に底冷がして來るに決つてゐるのぢや。

又七。早く鴨川に千鳥が啼くやうになればいゝと、お師匠様は待つてゐられるが、わし等のやうな無風流者はやつぱり四條の夕すゞみの方が賑かでいゝ喃。

十蔵。とりわけて都の冬は寒いから、比叡の頂きが白くなると、わし等は縮みあがつてしまふわ。と云つても、今から冬の噂はちと氣が早過ぎるかも知れぬ。そのうちによい日和があつたら、一日お暇を貰うて、高尾の紅葉でも見に行かうかの。

又七。ぢやが、瓢をさけて行くことは禁物ぢやぞ。おまへは兎角に酒の上がよくないからなう。いや、いや、春の花見とは違つて、秋のもみぢを眺めながら、酔うて管をまくものは妙なものぢや。

十蔵。それも人による。お前のやうに酒癖のわるい男は、春も秋も花も紅葉も差別があらうかい。

雨夜の曲

又七。

はよよよよ。

(景家の娘お園、十七八歳、奥の暖簾口より出づ。)

お園。

これ、又七……。

又七。

あい、あい。

お園。

景安はまだ戻らぬかえ。

又七。

眞葛ヶ原の辨天へ参詣にゆきました。

お園。

さのみ遠くもない辨天様へ、ひる前から家を出て、いつまで何をしてゐることやら、若や

又七。

ほかへ寄り道でもしてゐるのではあるまいかなう。

又七。

弟子とは云へど景安といふ名をも許されて、來年はおまへと女夫になる筈の男ぢや。案じ

又七。

らるゝのも無理ではないが、年こそ若けれ、あの男にかぎつては決して浮いた沙汰などあ

又七。

らう筈はござらぬ。

十藏。

さうぢや。あの男に間違ひがあつてはたまらぬ。まあ、まあ、格氣せずとおとなしう待つ

又七。

てゐなされ。

お園。

又そのやうなことを云うて弄るのか。ほかに寄道をしたのではあるまいか、と云ふたまで

又七。

ぢや。なんでわたしが格氣せうぞ。

又七。

はて、格氣すればこそ一々出入りを見張つてゐらるゝのであらうが……。したが、まあ安

又七。

心さつしやれ。あの景安は廿歳といふ今年まで、祇園島原はいふに及ばず、繩手や宮川町

又七。

の味も知らぬ男ぢや。現にいつぞやの夜も……。

十藏。

えへん、えへん。(眼で制す。)凡そこゝらで固いものと云つたら、腹帯地藏か景安かと、世

又七。

間でも専ら噂してゐるくらゐぢや。おまへの兄御の景正どのと一つ白で搦きませたら、丁

又七。

度よい加減の若い男がふたり出来ようものを……。さて、自由には行かぬものぢや。

お園。

ほんに景安とは打つて變つて、景正殿の島原通ひは、随分久しいものであつたが……。

又七。

あ、これ、又しても兄様の蔭口云やるか。父さまのお耳に這入るとむづかしい。殊にこの

又七。

頃はあの通り、廊通ひもふつつりと止んで、一心にお細工に凝つてゐらるゝものを……。

十藏。

過ぎ去つたことは今更云はぬがよい。

又七。

あれほど島原に凝固まつてゐた景正殿が、この七月から生れ代つたやうに、廊がよひの足

又七。

を絶つて、わきめも振らずに細工を勵んでゐるとは、不思議なこともあるものぢや喃。

お園。なんのそれが不思議であらう。兄さまとても性根はある。たとひ一旦は迷うても、夢がさめたら元の兄様ぢや。烏丸殿のおあつらへを受けてからは、一足も外へは出ず、廊のことなどは打忘れて、念入りの御細工にかゝつてゐらるゝ。おまへ達もちと見習うたがよからうぞ。

又七。その烏丸殿といふのが些と胡散ぢや。たのんだ人はほかにあるらしいぞ。

お園。頼んだ人がほかにあるとは……。

又七。お師匠様は名人氣質で世事に疎し、おまへも景安も正直者、人の云ふことは何でも一圖に

眞に受けてゐらるゝが、兄御がこの頃作つてゐる琴といふのは……。

十藏。これ……。又しやべるか。(袖をひく。)

又七。(うなづく。)ぢやによつて、わしは……なんにも云はぬのぢや。

(二人は顔を見あはせて黙る。お園は不審の眉をひそめる。)

お園。なにやら様子のあるさうな今の口ぶり……。これ、隠さずと云うて聞かしや。

(十藏は再び又七の袖をひく。)

又七。いえ、なんにも知りませぬ。

お清。(空呆けてゐる。お園はかんがへてゐる。島原の仲居お清出で、門口にて内をうかゞふ。)

もし、御免くださりませ。

又七。(又七は門口に出で来る。)

なんぢや。(表を見る。)おゝ、おまへは島原の……。

お清。はい。景正どのはお宿でござりますか。

又七。おゝ、その景正殿は宿にござるが……。 (お園の前を憚りながら。) なんの用ぢや。

お清。(そつと文を出す。) どうぞこれをお届けなされて下さりませ。

又七。あい、あい。たしかに受取つた。

お清。では、どうぞよろしくお願ひ申します。

(お清は早々に立歸る。又七は内へ戻つて来る。)

お園。これ、又七、それは島原の太夫から兄様のところへ来たのではないかえ。

又七。え。

お園。父様に見られぬやうに隠して置いたがよいぞ。

又七。

さあ。さう何も彼も知つてござるなら、いつそこれはお前に頼みます。そつと細工場へ行つて兄御に渡してくださらぬか。

お園。

そのやうなものを取次いで、又どのやうな係り合にならうも知れぬ。わたしは嫌ぢや。でも、まあ、頼まれてください。

又七。

いや、おまへ達が頼まれたのではないか。そこを又、わしから改めてお前にたのむのぢや。

景安。

（又七はお園に文をつき付ける。お園は断る。この押合のうちに、表より景安は足早に歸り来る。）
遅うなりました。

又七。

（又七はお園の袂に文をおし込む。）
お、今戻られたか。

お園。

（お園も忙はしく措寄る。）
景安……。ほんに遅いことであつたなう。

景安。

辨天様へまるつた歸途、あすこの辻の角の、二軒目の家のまへまで來ると、内では琴の液ひ講があるとみえて、大勢の人があつまつて、冴えた音色がきこえました。

お園。

お。

景安。

弾く人は誰か知らぬが、そのしらべの面白さに、我を忘れて聞き惚れて、半刻ほども立つてゐました。はゝゝゝ。

お園。

さうであつたか。（打笑みて。）いつもながら商賣の道には執心なことぢや。

十藏。

これで先づ御機嫌も直つたか。

お園。

いや、お天氣が直りさうで結構ぢやと云ふのでござります。（又七と顔を見あはせて打笑む。）
なう、景安。お前はまだ午の飯も済まぬであらう。早う奥へ行つて喫べたがよい。わたしがお給仕をして遣りませうぞ。

景安。

はい、はい。

又七。

今からこれでは、來年は思ひ遣らるゝなう。

お園。

えゝゝ、うるさい。黙つてゐや。
（お園と景安は睦じさうに連れ立ちて奥に入る。又七と十藏はあとを見送りて笑ふ。次郎時國と桐

屋伊兵衛出づ。

伊兵衛。もし、次郎様、あれほど念を押して置きましたに、まだ出来ぬでは困ります。

時國。ぢやと云うて、わしが手で作るものでは無し、相手が相手ぢや。なんほ催促しても埒がなかぬので、わしもほとく困じ果てゝゐるのぢや。

伊兵衛。先方からは毎日の催促で、仲に立つたわたくしも實に迷惑してをります。おうたがひ申すではござりませぬが、よもや嘘ではござりませぬ。

時國。なんでわしが詐り云はう。わしがほんたうに頼んであるか無いか、論より證據ぢや。景家の宿まで一緒に來やれ。

伊兵衛。はい、はい、まゐります。

時國。しかし表向はどこまでも私が頼んだ體にしてあるのぢやぞ。そちが滅多に口を出してはならぬ。よいか。

伊兵衛。そこに如才はござりませぬ。

時國。頼む。

十藏。はい、はい。

十藏。おゝ、これは、これは……。先づお通りくださりませ。

時國。そんなら免してたもれ。

又七。おゝ、伊兵衛どのも御一緒かえ。

伊兵衛。途中でお目にかゝつたので、ちよつとお角まで御一緒にまゐりました。

又七。まあ、こつちへ上りなさがよい。

伊兵衛。では、御免くださりませ。(内に入る。)

時國。早速ぢやが、景家は在宅かな。

十藏。はい、御細工場に居ります。

時國。このあひだから誂へて置いた一面の琴は、まだ出来いたさぬか。

又七。御細工に暇がいらまして、まだ出来いたさぬ様でござります。

時國。

(伊兵衛の顔をみる。伊兵衛は「もつと手厳しく催促せよ」と眼で知らすれば、時國はうなづく。)

十藏。

お急きなされるは御もつともでござりますが、何分ほかの御道具とも違ひまするので……え、そのやうな云譯はもう聞かぬぞ。やれ、明日の明後日のと、飽までもわしを阿房あつかひにして、憎い奴ぢや。

(伊兵衛は「さうだ、さうだ、もつと烈しくやれ」と眼で煽てる。)

時國。

お、さうぢや。おのれ等のやうな者共を相手にいつまで云うても埒はあくまい。わしが細工場へ押掛けて、直々に景家に催促してくれう。さあ、案内しやれ。(起ちあがる。)

まあ、しばらくお待ち下さりませ。

又七。

嫌ぢや、嫌ぢや。さあ、通るぞ。案内せい。

(支へる又七と十藏を突き退けて、時國は奥へゆかんとす。奥より景安出づ。)

景安。

あ、もし、どうぞお鎮まりくださりませ。御立腹は重々御もつともでござりますが、御細工も最うあらかたは出来上つて居ります。今しばらくの御勘辨を……いや、ならぬ、ならぬ。兎もかくも一應は景家に逢うて、きびしく云うて置かねばならぬ。

時國。

さあ、退け。え、邪魔するな。

景安。

たとひ何と仰せられましても、御細工場へ直々にお越しの儀はなりませぬ。

時國。

なに、通すことはならぬと申すか。

景安。

御川はわたくしが御取次ぎをいたしますれば、先づお待ち下さりませ。

(景安は無理に時國をそこに坐らせる。又七と十藏も共々に宥める。)

(11)

奥の細工場。平舞臺にて正面は壁。鴨居のうへには大なる神棚ありて、室の四隅には注連を張れり。上のかたには板戸の出入口あり。下のかたは板羽目。細工場の中央には小さき爐を切りて、膠銅をかけたなり。

(上のかたには金井長門守景家、五十餘歳、烏帽子、直垂下のかたに悴の小太郎景正、烏帽子、袖のや、狭き着付、小袴。いづれも刀を執りて、一心に琴の細工にかゝりある。あたりには琴の裏板、鑿、鉈、槌のたぐひ、木の屑など散亂せり。)

景家。

(琴の内部を抉りながら云ふ。龍唇の厚さはおよそ七分……。龍甲の抉り方が些と薄かつたか

な。いや、さうでもあるまい。このくらゐの厚味があればよい筈ぢや。む、む。

(景家はひとり首肯して微笑みながら、猶も餘念なく刀を下してゐる。景正は無言にて細工をついでる。板戸をあけてお園出づ。)

お園、

父様……。

(景家は見かへらす。お園は措寄る。)

お園、

景家、

もし、父様……。

お園、

(初めて見かへる。) お、娘……。なんぞ用か。丹波の大納言様の若殿がお越しでござります。大納言殿の御息が見えられたと……。大方また例の御催促であらう。お琴はまだ出来つかまつりませぬと申すがよい。

景家、

左様に申上げましたが、なか／＼御承知なく、是非とも細工場へ通つて景家に直談すると、以ての外のおむづかりでござります。

お園、

いや、藤原景家の御細工場へは、相傳の一人か門人のほかには餘人の妄りに通ることにはならぬと申せ。

景家、

お園、

でも、ほかならぬお方でござりますれば……。

景家、

はて、面倒な。(顔をしがめる。) よい、よい。そんなら私が出て逢はう程に、しばらくあれにお控へくたされと申して置け。

お園、

あい、あい。

(お園は起つて行かんとする時、袂より彼の文をおとす。景家は拾ひ取る。)

景家、

これはなんぢや。

(お園ははつと驚く。)

お園、

いえ、あの……それは……。

景家、

なにか知らぬが上下に紅をさいて、美しいものぢや。歌でも書いてあるのか。

お園、

はい。あの……。 (返答に困つてゐる。)

景家、

見てもよいか。

お園、

いえ、それは……。

景家、

は、わしが見るに仔細はあるまい。表書は女文字で、様まるる……なかく見事な手蹟ぢや。はて、なにが書いてあるか。

景家。

(景家は天地紅の文をあけて讀む。お園は氣を揉めども今更どうもならず、唯はらくしてゐる。景家、最初のうちは無言にて讀みぬたりしが、なかごろに至りて眉を擧む。)

む、其砌にたのみまるらせ候ふ琴の御細工は……もはや三月にも相成り候へども……今になんの御たよりも無之……。

景家。

(今まで一心に刀を執りぬたりし景正は、この文句を耳にして思はず頭をあげ、妹と顔を見あはせる。お園は文を指さして、とんだことが出来たと眼で知らせる。景正もおどろきて、猶も耳をかたむける。)

景家。

この頃は如何御暮し遊ばされ候ふやらんと、あまり思ひに堪へかね候ふま……む、

景家。

(景家はかながへながら又もや無言にてあとを讀みつゞくる時、最前より板戸を細目にあけて窺ひぬたりし景安は、衝と進み入りてその文をうばひ取らんとし、末の半分をひき裂きて爐のなかに投げ込めば、文は激と燃える。皆々おどろく。)

景安。

やい、景安。なにをするのぢや。む、扱はこの文は其方のところへ届いたのか。

景安。

左様でござりまする。

お園。

この文體は……遊女などから送り越したものの様にもみえるが……確にさうか。

景家。

あ、もし……お前は……。

景安。

(お園はおどろきて袖をひくを、景安は眼で制す。景家はわが手に残りし文殻をながめる。)

景家。

文はなかばより引裂かれて、末の宛名は讀まんのだが、自身の白狀に相違はあるまい。數ある弟子のうちでも見どころある若者と、わが名の一字をあたへて景安と名乗らせ、ゆくゆくは娘の婿にとも思つてゐるに、若氣のあやまりとは云ひながら、いつの間に色里の味をおほえたぞ。文言によつて察すれば、きのふや今日のことではあるまい。

お園。

恐れ入つてござりまする。

お園。

たはけた奴めが……。

景家。

(父の聲少しく暴くなれば、お園はいよゝゝ氣を揉む。)

お園。

いえ、それは違ひます。景安に限つてそのやうなことは……。

お園。

(景安は無言にて頭を掉り、なんにも云ふなと眼で知らせる。)

景家。

でも、罪もないおまへを叱らせては……。

景家。

罪の證據はこゝにある。(破れし文殻を示して。) やい、景安。おのれは遊女にたのまれて、

琴の細工を受合うたか。

え。

景家。 さあ、まつすぐに云へ。たしかに申せ。

景安。 はつ。

景家。 その琴はどこにある。

景安。 はつ。あの……よそにあづけてござりまする。

(今まで黙してゐたりし景正は、この時すこしく進み出づ。)

景正。 いや、その琴は……これでござりまする。

景家。 なに、その琴が……。烏丸殿より頼まれたと云ふたは詐りか。

景正。 父上、御免くださりませ。

景家。 む。

(景家も流石におどろきて、わが子の顔を屹とみる。)

景正。 これ、景安。島原の遊女より私のところへ送り越した文を、父上がなかば讀まぬうちに引裂いて火に焼きすて、宛名のしれぬを幸ひに、ひとの罪を身にひき受け、わしを庇はうと

景家。

する志は、かへすぐも忝けない。が、景正も男一匹、おのれが罪を他人に塗りつけておめくくと見物してゐられうか。父上、この景安は正直一圖の若者、決してお叱りくださるな。お目を掠めた不埒者は即ちわたくしでござりまする。

最前から景安とお園の素振、合點がゆかぬと思つたが、扱はまことの文の主は景正おのれであつたよな。烏丸殿よりたのまれたと詐つて、毎日細工を働んでゐたは、島原の遊女につかはす品か。(屹とむき直る。)さりとはおのれ、憎い奴……。今あらためて云はずとも、

一家内の者はみな存じてゐる筈。この景家は長門守を受領して、勿體なくも禁裡の御用をうけたまはる天下第一の琴師であるぞ。公家殿上人は是非もなし、その餘の人のあつらへは、たとひ百萬石の大名が膝を折つて頼んで來ても、きかぬと云ふが家の掟ぢや。その家柄も權式も打忘れて、人もあらうに傾城遊女が、色里でもてあそぶ琴三味線を、こゝで手づから作らうとは、家の恥とは氣がつかぬか、御細工場の汚れとは思はぬか。日本中の神々を勸請して、隅々には注連をはりまはし、一切の汚れを嫌ふこの御細工場で、よくも現在の親を盲にして、不淨の道具を作つたな。さあ、その琴をこれへ出せ。琴をなんとなされまする。

景正。

雨夜の曲

景家。なんとするとは知れたことぢや。(有合ふ蛇を執る。)

景安。では、あの琴を……。

お園。お毀しなさるのでござりますか。

景家。くだいことを……。打つて碎いて薪とするのぢや。

景正。いや、その儀は御免くださりませ。父上のお目を掠めて、大切の御細工場を汚しましたる

は、わたくしが重々の不心得、どのやうな御折檻を受けませうとも、さら／＼厭ひは致し

ませぬが……。これ、御覽じませ。未熟ながらも景正が三月このかた一心を籠めて……。

(琴をうち眺める。もはや七分通りは出来して居ります。これをむざ／＼と打毀しまする

は……。)

景家。ならぬと云ふか。遊女などに頼まれて作つた琴を、おのれはそれほど大事に思ふか。

景正。たとひ頼んだ者は誰でござりませうとも……。遊女であらうと、ぬす人でござりませうと

も……。これはわたくしの手から生れ出たものでござりまする。

ぢやによつて、毀せといふのぢや。

景正。いや、その儀ばかりは……。

景家。

景正。

景家。え、兎かう申すな。

(景家は蛇をふり上げて進まんとするを、景安とお園はなだめながら支へる。板戸をあけて時國と

伊兵衛出づ。)

伊兵衛。あ、これ、どうなされた。まあ、まあ、お待ちなされぬか。

(伊兵衛も中へ割つて入る。)

時國。これ、さつきから私等を待たせて置いて、親子喧嘩をしてるやろのか。そんなことは後に

して、これ、景家、わしがいつぞや誂へた彼の琴はもう幾日になると思ふぞ。出来るもの

か、出来ぬものか、しかと返事をしてくりやれ。

景家。(形をあらためる。失禮の段は眞平御免くださりませ。いつぞやお誂へを受けましたる御道

具は……(わが琴を指して。もうこれほどに出来して居りますが、裏板の取り付や何や彼

やで、まだ／＼一月あまりは手間取りませうかと存じまするが……。)

時國。さうかなう。

(伊兵衛の顔をみる。伊兵衛は頭をふる。)

時國。ひょうぢや。二三日のうちには出来ぬか。

景家。それはなりません。たとひ出来ましたとて其のやうな急細工では、おまへ様方の御道具にはなりません。

時國。いや、もうかうなれば急細工でもよい。一日も早く出来ればよいのぢや。

景安。なぜ又そのやうにお急きなされるのでござりまする。

時國。それはお身たちの知らぬことぢや。これ、景家。わしが折入つて頼むほどに、どうか二三日のうちに……。

景家。金井長門守藤原景家作と銘を打つ品に、さやうな疎略なことは相成りませぬ。どうでもならぬか。

伊兵衛。(思案して囁く。)もし、次郎様。これはもう何もかも打明けて、お頼みなされては如何でござりませう。

時國。さあ。

景家。では、なにか仔細があるのでござりまするか。ことの仔細によりましては、わたくしも夜目の目も寝ずに精限り根かぎり、働いても見ませうが……。

時國。では、仔細を云うたら背いてくるか。

景家。さあ、かならず出来るといふ御請合はなりません。先づ出来るだけは急いでも見まする。

時國。お、それで少しは安堵したが、わしの口からその仔細を云ふのはなう。

伊兵衛。おまへ様から云ひにければ、わたくしが代りに申しませうか。

(時國うなづく。伊兵衛は少しく進み出づ。)

伊兵衛。かやうなことを申したら、さだめて御立腹かも知れませぬが、實はそのお琴は……彼のお人の御道具ではござりませぬ。

景家。なに……。 (時國を見て。) あなたの御道具ではないと……。

(時國は面目なげにうつむく。景安とお國はあきれて顔を見あはせる。)

景家。さりとて不思議なことを續けて聞くものぢや。景家親子が三月越し、この御細工場に引き籠つて、一心に作つてゐた琴と琴は、二面ながら揃ひも揃うて詐りの品か。(景正の琴を見て。) せがれの細工は烏丸殿おたのみと申すは詐りで、まことは島原の遊女のために作ると云ふことを、今の今はじめて知つたが……。わが手づから作りし琴も……。 (わが琴を見て。) これも丹波の若殿のものではなく……。 (驚きながらやゝ怒を帯びて。) して、これは、誰にたのまれた。

伊兵衛。

大津の町にすむ物持の商人から……。と申したら相手は町人、すぐに断ると云はるゝかも知れぬが、今となつては断るにも断られぬ、切ないわけがござるのぢや。

(景家はいよく怒をふくんで答へず。伊兵衛は更に景家にむかつて云ふ。)

伊兵衛。

まあ、聞いてください。右の商人が景家殿の作つた琴を達ての所望ぢや。さりとして正面から云ひこめば断らるゝのは知れてゐるので……。 (時國を見て。) あなたに内々でおねがひ申し、表向きはあなたの御道具のやうに云ひこしらへて……。

景安。

では、あなたの御道具と仰せられたは……。

伊兵衛。

實のところは詐りぢや。それには又云ふにははれぬ譯もあつて、その琴がいつまでも出来せぬときには、一旦請合ふたあなたも御迷惑、仲に立つたわたくしも迷惑、諸方に色々の難儀が起らうと云ふものぢや。そこを察して一日も早く出来するやう、こなたからお師匠様によく頼んでくださらぬか。

景安。

それならば寧ろはじめから打明けられたら、又取りなしの仕様もあつたものを……。困つたことになりましたなう。(景家にむかひて。) もし、お前様。お聞きの通りの次第でござりまするが……。

時國。

これ、景家。いつはりを云ふたは、わしが一生のあやまちぢや。この通り、手をついて詫びるほどに、どうぞ料簡してその細工を急いでくりやれ。たのむ、頼む。

お園。

わたくし共が差出したことではござりまするが、あなたもあの様に仰しやるものを……。今度だけは機嫌を直して……。

伊兵衛。

さうぢや、さうぢや。今度だけはこゝろよく承知してくだされば、三方四方が圓く治ると申すものぢや。

時國。

否か應か、早う返事を聞かしてたもれ。

景家。

その御返事は易いこと。これ、御覽なされい。

(景家は再び彼の鉈をとりて、わが作りかけたる琴を眞二つに打ち砕く。)

お園。

あ、お琴は眞二つぢや。

伊兵衛。

折角七分通りは仕上つたものを……。惜氣もなくむざくと……。

(みな顔を見合はせておどろく。)

景家。

なにを驚く、何をさわぐ。金井長門守景家は日本にふたりとない禁裏のお琴師、たとひ山ほどの黄金を積まうとも、町人風情の道具を作らうか。積つて見ても知れたことぢや。

時國。では、どうあつても……。これ伊兵衛、ひよんなことになつてしまつた。

伊兵衛。いくら名人氣質でも、片意地にも程がある。と云うたところで、もう斯うなつては……。あゝ、折角見事に出来たものを……。惜さうに碎けたる琴をながめる。今更仕様がござりませぬ。

景正。いつもの御氣性とは云ひながら、ほんに思ひ切つたことをなされました。

(皆々再び顔を見あはせて嘆息す。)

景家。やい、景正。おのれも職を重んずる心があらば、父を見習へ。

(持つたる鉈をなげて遣る。景正はしづかに見返る。)

景正。おまへ様とわたくしとは、親子でも心が違ひまする。

景家。おのれの作つたものがそれほどに惜いか。

景正。先刻も申した通り、一心を籠めて生み出したものを、どうしてむざくと毀されませう。この儀ばかりは何うあつても……。

景家。むゝ、どうでもそれを毀し得ぬか。

(景正じつとなりて、父の顔を見あげる。)

景正。わが手で作つた細工物を、わが手で打碎きまするのは、おのが手足を切りきざむよりも、

情なうござりまする。お察しく下さりませ。

(思ひ入つて云へば、景家少しくかながへて、詞を和らげる。)

景家。よい、よい。それもきこえた。では、その琴を大事にかゝへて何處へなりとも勝手にゆけ。

お園。え。あの、兄様を御勘當……。

景安。生憎と色々のことが落合うて、御機嫌はさんぐでもござりませうが、大事の御世繼を御勘當とは、餘りにむごい御成敗……。そのやうなことの無いやうにと心を碎いた甲斐もな

く……。嘆息して。もし、お師匠様。わたくしが代つてお詫をいたしますれば、どうぞ

今度だけは幾重にも御勘辨をおねがひ申しまする。

お園。文を取り落したはわたくしの粗相、それからこのやうなことが起りましたは……。

景家。いや、いや、そち達はなんにも云ふな。これ、忤……。

景正。はあ。

景家。世間の親と一つに思ふな。この親の勘當は憎いが半分、可愛いが半分ぢや。許つて親の眼をくらし、大切の御細工場で遊女どもが弄ぶ琴を作る。それだけでも勘當の罪はある。

憎い奴、不所存者め。……とは叱るもの、今の世の若い者、むかし氣質の親とは心の入れ方が違つて、たとひどのやうな羽目になつても、おのれが細工物を飽までも大事にするとは……。 (景正をじつと視て。) おもへば可愛いところもある。それほど大事の細工ならば親の口から毀せとも云ふまい。

景正。では、御勘辨くださりまするか。

景家。さりとして、御細工場を汚すことはゆるさぬぞ。一旦は勘當ぢや。どこへでも立去つて、作りたいものを勝手に作れ。

景正。はあ。

(景家はお園と景安を見かへる。)

景家。どうぢや、判つたか。

景安。恐れ入つてござりまする。

伊兵衛。(嘆息する。)

時國。もう斯うなつては我身の破滅ぢや、伊兵衛、どうしたらよからうか。(おろろく聲になりて涙ぐむ。)

わづか半响か一响の間に、思ひも寄らぬことが色々と降つて湧いて、右を見ても左をみて、お氣の毒なことばかりぢや。若殿さまのお琴は毀され、兄さまは御勘當……。 え、いつまでもくどくど云ふな。若殿にもお歸りあれ。景正も早くゆけ。

景安。

わづか半响か一响の間に、思ひも寄らぬことが色々と降つて湧いて、右を見ても左をみて、お氣の毒なことばかりぢや。

お園。

若殿さまのお琴は毀され、兄さまは御勘當……。

景家。

え、いつまでもくどくど云ふな。若殿にもお歸りあれ。景正も早くゆけ。

景正。

はつ。もろくの不淨で御細工場が汚れた。景安、切火を打て。

景安。

はつ。(景安は切火を打つ。景家は形をあらためて神棚のまへに拜す。景正はあたりに散りたる鑿や槌などを取片附ける。)

お園。兄様……。お前はいつでも行かれますか。
(お園は兄にとり纏る。景正は無言にてその顔を見る。時國は起たんとして思はずよるめく。伊兵衛は介抱する。入相の鐘きこゆ。)

—幕—

第三幕

下駄峨の庵室。茅葺屋根の二重屋體にて、正面の上のかたには大いなる佛壇あり。つゞいて壁のまへには柱をかけたる新しき琴を立てたり。壁につゞいて佛畫を描きたる古き襖あり。その前には爐を設けて湯釜をかけ、爐のほとりには粗染籠などあり。下のかたの横手には竹窓あり。竹縁は正面より上の方まで折りまはして、縁さきには竹の笥あり。切株の杵ねぎあり。庭の上のかたには熟せる柿の大樹ありて、下のかたの門口は丸太の柱に竹の扉を閉ぢたり。扉の外にも紅葉せる大樹あり。上下ともうしろは田畑を隔て、二三の人家、岡、森など遠くみゆ。

(十月中旬のゆふぐれ。僧西念は箒を把つて、庭に散る紅葉をはいてゐる。一夜念佛の鉦の音遠くきこゆ。下手の奥より珠數をもちたる老婆は孫娘の手をひきて出で、扉の外を過ぎて向ふに去る。西念はやはり落葉を掃いてゐる。すこしく間を置きて、里の娘ふたりは珠數を持ちて出づ。西念は表を掃除せんとて扉をあける。)

西念。お、お光どの、お照どの……この日暮に揃うてどこへ行かるゝのぢや。

(娘等は微笑みながら珠數をみせる。)

西念。は、あ、十夜のお念佛にまるるゝのか。若いに似合はず御信心なことぢや。

お光。ことに今夜は方々のお寺から和尚様がお出でなされて、ありがたい御説法があると聞きました。

お照。こちらの御庵主様も、定めてお越しなさるであらうな。

西念。もう半响ほども前からお出でなされた。わしもこちらを片附けたら、後からそろゝとまゐらねばなるまい。

お光。おまへもお説法をなさるのかえ。

西念。は、わし等のやうな青道心が、勿體らしく説法したとて誰が眞面目に聞かうぞ。わしは庫裡に詰めてゐて、湯でも汲むお手傳ひをするばかりぢや。

お照。なんの、なんの、お前がお説法をなされたら、わたし等は喜んで聴かうものを……。

西念。いや、ありがたいことを云うてくるゝ喃。お前方のやうな若い女子達ばかりが揃うてゐれば、わしも一心不乱になつて、説法でも談義でもして見ようが、兎かく十夜の念佛講にま

西念。 誓紙をかいたか。

景正。 熊野牛王も見そなはせと、ふたりが生血を紙に染めた。

西念。 (いよ／＼出出す) こりやさうなうては叶ふまい。あすは久振りでその太夫に逢うて、先づ

なんと云はつしやるな。

景正。 なんと云はうか。(笑つてゐる)

西念。

わしがその太夫ならば、なんにも云はずに先づ腹づくしを斯う取つて……。は、は、は。定めてさまざまの口説があるであらうな。こりやいよ／＼堪らぬ。ひとのことも何だか體がぞく／＼する様ぢや。え、え、もう、喉が潤いて来た。

(西念は爐のほとりに行きて、釜の湯をくんで飲む。景正は再び琴を眺めてゐる。向ふより小坊主一人出づ。)

小坊主。 これ、西念どの。西念殿。

西念。 なんぢや。なんぢや。

小坊主。

もうお説教がそろ／＼始まるほどに、西念にも用がある。早う呼んで来いとお師匠様が仰しやつたぞ。

西念。 あ、よし、よし。こつちでも面白い御説教が始まつてゐるところぢやが……。まあ勤な

らば是非もないわ。今すぐに参りますと申してくれ。

小坊主。

西念。 いや、いや、あの西念はするい奴ぢや。そなたと一緒に引張つて来いと仰せられた。あ、正直一圖の西念を、狡い奴とは情ないことぢや。では、一緒にゆくから、待て、待

て。

(西念は奥に入りて頭巾と珠数など持ち来る。小坊主は縁に上がりて、佛壇に燈明をさげろ。)

小坊主。 さあ、さあ、早う来さつしやれ。

西念。 え、忙しい。今行くといふに……。 (景正にむかひて) では、景正どの。留守をたのみ

ますぞ。

景正。 今夜もさだめて遅いでござらう。お勤とは云へ、御苦勞でござるな。

西念。 かうなると結句凡夫が羨ましくござるて。(草履をばく) さあ、行け、ゆけ。

小坊主。 ちよつと待つてくだされ。

(小坊主は柿の木の下へ走りゆきて、熟したる實を二つ三つ取りて袂に入れる。)

西念。 え、貴様は猿か鴉の生れ代りか。あけても暮れても柿ばかり狙つてゐる。さあ、遅くな

ると御師匠様に叱られるぞ。

小坊主。あゝ、あゝ。

(西念は先に立ち出てゆく。小坊主は袂より柿をだして眺めながら後よりゆく。向ふより桐屋伊兵衛出て来り、雙方ゆき逢ふ。)

伊兵衛。おゝ、西念坊か。

西念。伊兵衛どのか。こなたも十夜へおまゐりかの。

伊兵衛。いや、後生をねがふよりも此世のことが先づ大事ぢや。して、景正殿は内にござるかのおゝ、居る、ゐる。このあひだから丹精の琴が出来上つたと云うて、ひとりでにこ〜してゐますわ。

伊兵衛。琴が出来たとあれば丁度幸ひぢや。では、鳥渡たづねて来ませうか。

西念。ほかには誰もゐぬから、ゆつくりと遊んで行かつしやれ。

(雙方挨拶して、西念と小坊主は去る。伊兵衛は門口に来る。)

伊兵衛。もし、御免ください。

(景正初めて見かへる。)

景正。どなたでござるな。

伊兵衛。伊兵衛でござります。

景正。おゝ、伊兵衛どの……。遠慮なしにこれへ、これへ……。わしが此處にゐることがよう知れしましたな。

伊兵衛。(縁に上る。)先月の一件から親御の御機嫌を損じて、どこへか御立退きになつたとやら……。それからだんぐりに心當りを探つてみますと、この庵室にお假住居といふことが此頃やう〜判りました。

景正。譯はこなたも知つてゐるよう。父上の御勘氣をうけて、差當り身の措所もなきまゝに、こゝの庵主とは舊い馴染でもあれば。先づかゝりうどと相成つて、しばらく鹿を借りてゐるのぢや。ようぞたづねて下されたな。

伊兵衛。あんまり好くもまゐりませぬ。さういふ御逼息の折柄に、かやうな事を申上げますのも、まことに心苦しうはござりますが、先頃お渡し申しました桐の一件……。なにぶん五十兩といふ高値の品でござりますれば、問屋の方でもさう何日までも待つてはくれませぬので、中に這入つたわたくしも甚だ迷惑してをりますが……。

景正。それは如何にもお氣の毒なことぢや、併し伊兵衛どの。あの桐の木地はよいものであつた。御意に入りましたか。どうしても二百年以上の品でござりませうが……。

景正。たしかに二百年以上、しかも禪寺などの庭に栽ゑられたものであらうな。

伊兵衛。左様でござりませうか。

景正。

琴に用ゆる桐材は、雷火に撃たれたものか。但しは寺内にうるられて、あさゆふに鐘の音が沁み込んでゐるものか。二つに一つを最も好しとするが、この道の秘傳ぢや。先刻柱をかけて試して見たところ、その音色は寺に栽ゑられたものと察せらるゝが……。

伊兵衛。

いくら私が商賣人でも、そのやうな深いところまでは迎も鑑定は付きませぬ。して、そのお琴はどこにござりますな。

景正。

あれぢや。まあ、見てくれ。

伊兵衛。

はい。

(伊兵衛は起つて、彼の琴をともしびの前へ持來り、つくづく眺めて感心したる體なりしが、再びこれを舊のところに立て置く。)

伊兵衛。

いや、恐れ入りました。お見事のものでござります。(少しく思案して。)くどくも申すやう

景正。

でござりますが、あの桐の價につきまして、問屋からもたび／＼催促を受けてゐるのでござりますが……。如何でござりませうか。それを手前にお譲り下さるわけには……。

伊兵衛。

でもござりませうが、あの琴はどうしても金百兩以上の價はあらうかと存じます。あれを懇望する人に賣拂ひまして、そのうち五十兩を問屋にわたし、残りの五十兩をおまへ様が當座のお小遣ひになされましたら、わたくしの顔も立ち、お前さまの御手許も樂になり、つまり双方のためかとも存じます……。)

景正。

折角ぢやが、それは斷る。懇望の人はほかにあるのぢや。

伊兵衛。

では、桐の料金五十兩はどうして下さりますな。

景正。

おまへの迷惑は察してゐるが、わしの迷惑も察してくれ。景正が世に出るときがあらば、桐の價は二倍三倍にしても戻してつかはすから、どうぞそれまで待つてくれ。

伊兵衛。

わたくしの事ならば又どうとも御相談も致しませうが、なにぶん問屋の方からむづかしく云つてまゐりますので……。

景正。

そこを折入つて頼むと云ふのぢや。わからぬかなう。

伊兵衛。

いや、判つては居りますが……。どうも、まことに困りました。今年はわたくしの厄年でござりませうか。爲ること爲すことが皆くひ違うて……。お前さまも御存じの通り、丹波殿の若殿から手をまはして親御様におねがひ申したお琴も……。あのやうな始末になつてしまひました。

景正。

さう聞けば重々氣の毒なことぢやが……。さりとしてこの琴を渡すことも成らず、金を拂ふことも出来ぬ。まあどうぞ今しばらく堪へてくれ。して、彼の時國殿は其後どうなされた。それが又お氣の毒なものでござります。約束の琴が出来ぬからは百兩の金をもどせと貸方からは矢の催促、仲に立つたわたくしは云ふにおよばず、時國様も途方に暮れておいでのところへ、又ぞろ飛んだことが出来しましてなう。

伊兵衛。

飛んだことゝは……。時國様が魂までも打込んでゐられた島原の逢坂太夫といふのが、急に身請になつてしまひました。

景正。

逢坂太夫が身請になつたと……。して、その客は……。前々から彼のお人と張合うてゐた堺の大盡が、小判の箱をつんで太夫を根こぎに……。な

伊兵衛。

ひました。

景正。

んほこつちが地踏踏踏んでも、金の力にはかなひませぬ。太夫がおめく根引きされたか。(嘆息して)時國殿と逢坂太夫とはあれほど深い仲でありながら……。女のこゝろは判らぬものぢや。

伊兵衛。

金にころぶが廓の習。遊女の嘘にだまされたと、諦めるよりほかはござりますまい。時國殿はあきらめたか。

景正。

いや、なか／＼諦められぬとみえまして、明けても暮れても恨んで泣いて……。

伊兵衛。

むゝ、もつともぢや。

伊兵衛。

たうとう此頃では氣狂ひのやうになつて、どこを的とも無しに太夫をたづねて、そこらを狂ひ歩いて居らるゝとの噂……。お可哀さうではござりませぬか。

景正。

世にもあはれな話ぢやなう。

伊兵衛。

それがよい手本で、お前様などもまあ御用心なされたが宜しうござりますぞ。では、わたくしももう諦めてそろ／＼お暇といたしませうか。

景正。

桐の代金はどうぞ待つてくだされ。

伊兵衛。

いくら御催促申しても、今が今と申しては何うもなりませんまい。今夜は先づこれで……。

いづれ又お邪魔にうかひます。

(伊兵衛は挨拶して縁を降りる。景正も起つて見送る。)

景正、もう月の出る頃ぢやに……暗い夜ぢや。氣をつけて行かれたがよい。
伊兵衛、はい、ありがたうござります。

(伊兵衛は立歸る。念佛の鉦きこゆ。)

景正、三月あまりも廓へ足踏をせなんだが、思ひもよらぬ噂を聞いた。廓の花とうたはれた逢坂太夫が、あれほど云ひかはした時國どのを袖にして、堺の大盡とやらに心を移すとは、さすがは廓の女子ぢやなう。可哀や時國殿は氣が狂うて……女を尋ねてさまよふか。いや、わしとても狂うであらう。今も伊兵衛が云ふた通り、これが男のよい手本で、鞆繪太夫もどうしてゐるやら……。

(壁に立てたる琴はおのづから鳴る。)

景正、や、琴が……。

(怪みて見かへれば、琴は再び鳴る。)

景正、合點のゆかぬ琴の空鳴……心の迷ひか、そら耳か。(かながへる。いやはたしかに鳴つた。)

……鳴つたのぢや。しかも人間の爪先では逆もひき出されぬほどの……訝えてはるれど……弱い……弱い音色であつた。はてなう。(又もやかながへる。)もしや調子に狂ひでも出たのか。

(景正はあわて、琴を持ち出し、燈火のまへにて凝と視る。鉦の音は絶えずきこゆ。景正の妹お園は提灯を點して出で、門に來りて提灯をかくしながら内をうかゞふ。景正は琴をながめる。)

景正、龍唇……龍角……龍甲……龍尾……刀の扱方には一分の狂ひもなく、本地といひ、細工と云ひ、あつばれ揃うた名器とは、あながちに我が自讃ではあるまい。天下第一の名を取つた父上でも、おそらくこれほどのものは作り得まいと思はるゝが……。

(景正はわが作りし琴を惚々とながめてゐる。お園は門をあけて衝と進み入る。)

お園、兄様、お琴は出来ましたか。

景正、お、妹……出来た、出来た。これを見る。

(お園は提灯を吹き消して、縁にあがる。)

お園、先づ其後はお變りもござりませぬか。

景正、え、そのやうな挨拶はあとて云へ。これ、これを見る。兄が根かぎりに作つたものぢや。

なんと見事な出来であらうが……。

お園。(琴を凝とみる。)

景正。

そちも景家のむすめ、景正の妹ぢや。よく目き、をいたしてくれ。さあ、兄が用るた刀の
冴えに、毛筋ほどの難もあらば、遠慮なく申してみろ。

お園。

兄様、よう出来ましたなう。

景正。

褒めてくるゝか。

お園。

わたくしばかりではござりますまい。父様もこれを御覧なされたら、あつばれ二代の景家
ぢやとお褒めなさるでござりませう。

景正。

それは一時のお腹立ちからでござりまする。このやうな名作をお目にかきましたら、父様
のお心もやはらいで、御勘氣が赦りまいものでもござりませぬ。及ばずながらわたくし共
もお傍に附いて居りますれば、かならずよい様にお取りなしを……。

お園。

こゝに忍んでおいでのことを人の噂にききましたれば、お十夜へまると云ひこしらへて、

景正。

して、今宵はなにしに來た。

お園。

こゝに忍んでおいでのことを人の噂にききましたれば、お十夜へまると云ひこしらへて、

窃とおたづね申しました。

景正。

いつもながら優しい志ぢや。あらためて禮をいふぞ。父上にもお變りはないか。

お園。

はい。相變らず御達者でござりまする。

景正。

景安も無事かな。

お園。

無事に暮してをりまする。

景正。

太夫の文を火にやいて、わしを庇はうとしてくれた親切は、景正決して忘れぬと申してく
れ。

お園。

はい。

景正。

年があらたまらば、そちと景安とは女夫のさかづきもする筈ぢや。ふたりが仲好うして、
父上に孝養をたのむぞ。

お園。

はい。

景正。

いや、恥かしかるには及ばぬ。兄も戀を知らぬ男ではないわ。

景正。

(景正は微笑む。お園は恥かしげに俯向く。)

景正。

時にお園、丁度よいところへ來てくれた。この琴は我ながら好う仕上げたと思ふものゝ、

まことの音を出して見ねばまことの良否はわからぬものぢや。琴を作ることは景正決して人に劣らうとは思はぬが、琴を弾くことは逆もそちには及ばぬ。どうぢや、こゝで一段聞かしてくれぬか。

お園。

いつもながら拙い調べではござりまするが、折角のお詞でござりますれば……。

景正。

おゝ、所望ぢや。しばらく待て。

(景正は起つて奥に入る。お園は琴をとりよせて我が前に直し、形をあらたむ。景正は琴爪を持ちて出て来る。)

景正。

ありあはせの爪ぢや。指の加減はどうであらうか。

(云ひつゝ、琴爪をわたせば、お園は會釋してうけ取り、爪を指に嵌める。)

お園。

なにを致しませうか。

景正。

唄を聴くのではない、音色を聴くのぢや。なんなりとも好いものを弾け。雨夜の曲などはどうぢやな。

お園。

宜しうござりませう。

(景正はともしびの位置を直す。お園は琴にむかつて靜かに弾きはじめる。景正は耳をかたむけて

聴く。庭に月の影あかるし。琴はやうやく進みて、爪音いよ／＼冴えたる時、燈火はふつと消えて、折りまはしたる竹縁の上のかたの奥より鳥原の朝繪太夫あらはる。あかりは消えても幸ひに月が出た。つゞけて弾け。

(朝繪太夫は立つたるまゝ、柱に身をよせて琴を聴く。景正はやがて心づきて透しみる。)

景正。

や、そこにあるのは太夫でないか。おゝ、朝繪……太夫……。どうしてこゝへ……。

朝繪。

琴の音色にひかされて來たわたちぢや。爪音が消ゆればわたしも消ゆる。どうぞ止めさせて下さんな。

景正。

琴がやめば消ゆるとは……。

(お園はなんの氣も附かず、一心に琴を弾いてゐる。この琴が相方になるやうに工夫すべし。)

朝繪。

景正どの、久しう逢ひませぬな。

(景正もなつかしさに我を忘れて語る。)

景正。

おゝ、わしとてもおなじ思ひぢや。數ふればもう四月になる。そなたにたのまれた琴の細工が思ふやうに出來ぬあひだは、飛附きたいほど戀しうても必ず逢ふまいと約束して、ふたりが別れたは……おゝ、七夕祭の夜であつた。

鞆繪。年に一度は逢ふといふ、星の契りを羨みながら、送る出口の途々でお前はなんと云はんした。

景正。遅くもこの秋の末までには、琴は見事に仕上げてみせう。多寡が二月か三月のわかれと、

鞆繪。口では立派にいふものゝ、心はあとにひかされて、編笠茶屋からすごく戻つた。

鞆繪。その二月か三月のために、わたしは命を縮められ、戀しく煩うて、秋のなかばから枕もあがらず。

景正。おゝ、煩うてるやつたか。

鞆繪。あまりのことに堪へかねて、文は遣れどもたよりは無く。

景正。その文から露顯して、わしは勘當の身となつたが……。 (お國の琴を指さして。) これを見や

鞆繪。れ。たとひ何のやうなことがあつても、かならず約束は違へまいと、わしは一心不亂にな

鞆繪。つて、琴はこの通り立派に仕上げた。

景正。その眞實が嬉しさに、島原よりも遠い世界からうろくくと、絲の音色に迷うて來ました。

鞆繪。遠い世界から迷うて來たとは……。
なんほ戀しいと思つても、もうおまへとは逢はれませぬ。

(鞆繪太夫は泣く。景正怪みて措寄る。)

景正。なんの逢はれぬことがあらう。あすにも琴を持參して、積る物語をせうものと、今朝から

鞆繪。楽しんでゐたものを……。そつちから好うたづねて來てくれた。さあ、これへ來や。……は

景正。て、何をすねてるのぢや。さあ、これへ來て、よう顔をみせてくれ。

鞆繪。そばへ行きたいは山々なれど……。

景正。まだ其のやうなことを云つて私をじらすか。いつもの口説はやめにして、今宵はうち解

鞆繪。て仲好う語らう。(鞆繪の顔を見て。) 見れば顔の色がよい様ぢやが、病はまだすつかり

と本復せぬか。

鞆繪。あい。

景正。おゝ、髪もみだれて、顔もいかう瘦せたやうぢや。

鞆繪。おまへの顔にも瘦がみえた。わたしといふものがある爲に、いとしや色々の苦勞をしなさ

景正。んしたか。

鞆繪。苦勞は互ひぢや。思にも着せまい思にも着まい。それがまことの戀といふものぢや。

景正。

いつはりならぬ證據には、家をすてゝも約束を果した。

朝繪。

その琴は戀に死んだ女のかたみ……。わたしの魂が宿つてゐると思つて、一生大事にしてくだりませ。

景正。

え、なにを云ふのぢや。

朝繪。

景正どの……。

お園。

(朝繪太夫はなつかしげに摺寄る時、お園の弾きゐる琴の絲切れる。)

景正。

あ、絲が切れました。

景正。

絲が切れたか。

景正。

(朝繪太夫のすがたは消ゆ。)

景正。

や、太夫はどこへ……。太夫は……。

お園。

(景正はあわて、追はんとするを、お園は駆け寄つて支へる。)

景正。

もし、兄様、どうなされたのでござります。

景正。

(夢の醒めたるごとくに四邊を見まはす。)

お園。

お、太夫は見えぬ……。太夫はどこへ行つたであらうな。

お園。

え、(氣味悪るさうに見まはして)誰もほかには居りませぬ。

景正。

今までここに立つてゐたのが……。琴の音がやむと一緒に、ありし姿は煙のやうに……。

お園。

そんならこゝへ島原の太夫が……。

景正。

お、朝繪太夫がたづねて來たのぢや、そちの眼にはなんにも見えなんだか。

お園。

さつきからお前が低い聲で、なにか獨り言を云うてゐられましたか……。

景正。

お、わしが獨り言を……。では、今こゝへ見えたのは……。

お園。

かりの姿か。

景正。

まほろしか。(考へる。)

景正。

もしや太夫はこの世を去つて……。

景正。

(お園はいよく氣味悪げにあたりを見廻はす。景正は嘆息する。)

お園。

さうぢや、島原の太夫がこゝへ來る筈がない。最前から合點のゆかぬ詞の節々と思つたが……。

お園。

別れてしばらく逢はぬうちに……。太夫は死んだか。

景正。

そのたましひが絲にひかれて……。

お園。

假に姿をあらはしたのであらう。

お園。

あはれなことござりましたな。

景正。

(お園は泣く。景正は琴を見かへる。)
糸は切れても琴は残つた。縁はきれても魂はのこらう。わが作とは云へ、今は太夫の
のぢや。妹、その琴を……。

(立てよと命ずれば、お園はなみだながらに起ちあがりて、糸の切れたる琴を壁に立てる。景正は
佛壇より香と香爐をもち來りてその前にそなへ、先づ焼香の回向すれば、お園もつゞいて焼香す。
念佛の鉦の音きこゆ。)

お園。

あれ、折も折とて十夜のお念佛が……。

景正。

今までは夜毎夜毎に、上の空で聞きながしてゐたあの鉦も、今宵は胸に沁みるやうな。
(景正は縁に立ちて、鉦の音を聴く。お園は琴にむかつて合掌す。次郎時國はしどけなき姿、物に
狂ひし體にてうか／＼と迷ひ來る。)

時國。

お、琴の音がきこえたのは……いづこぢや……どこぢや。お、太夫が呼んでゐる。太
夫……太夫……わしはこゝにゐるぞ。

(現ともなくあゆみ來て、扉をおしあけて庭に迷ひ入る。お園は透しみる。)

お園。

お、丹波殿の若殿ではござりませぬか。

時國。

お、太夫はこゝにゐるか。

(縁へ駆けあがりてお園を庭へひき下す。)

お園。

あれ、どうなさるのでござりまする。

(景正も縁さきに出で、聲をかける。)

景正。

もし、おせきなさるな。それは景正の妹……。逢坂太夫ではござりませぬぞ。

(時國はお園の顔をつく／＼ながめて失望す。)

時國。

お、太夫ではない。違ふ……違ふ。

(お園をつき放して上のかたへ行かんとするを、お園は抱きとめる。)

景正。

時國どのも……景正も……そろひも揃うて……。

(嘆息しつゝ類るゝごとく縁に坐す。時國はお園をつき倒して、夢みるごとくに月を仰ぐ。念佛の
鉦の音きこゆ。)

幕

貞
任
宗
任

明治四十三年十一月作。

明治四十四年一月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——阿部貞任、八幡太郎（市川高麗藏、後の松本幸四郎）
阿部宗任（市川左團次）丹後小次郎（市川壽美藏）外ヶ濱の十藏（市川小團次）
鎌倉権五郎・津輕六郎（市川左喜之助）岩手五郎（市川左升）南部太郎（市川荒
次郎）眞弓（中村歌六）山の井（澤村源之助）松山（澤村宗之助）小磯（市川莚
若、後の松蔦）など。

登場人名——八幡太郎義家。阿部次郎貞任。阿部三郎宗任。丹後小次郎時兼。鎌倉権五郎景政。岩手五郎。南部太郎。津輕六郎。外ヶ濱の十藏。十藏の娘小磯。貞任の母眞弓。貞任の妻山の井。貞任の妹松山。貞任の一子千代童。ほかに濱の娘。女房。若者。小兒。貞任の家來。義家の家來。侍女。宮奴など。

第一幕

奥州、外ヶ濱。漁師十藏の住家。上の方へよせて二重屋體。屋根には板をならべて、石または貝殻をのせたり。正面には筵をたれたる三尺の出入口、左右は板羽目、下のかたに爐を切りて土瓶粗菜籠などを置き、壁には義笠などをかけたなり。家のそこには梅と櫻の立木、花は同時に開きたる體なり。下のかたは浪打際にて、あら海を隔て、遠く蝦夷の島を見る。

（濱の娘三人、髪をむすびて垂れ、筒袖、わら草履にて、磯に寄りたる流れ木を、熊手に掻きあつ

貞任宗任

めてゐる。康平五年四月なかの午後。天は晴れたれども、海の音高し。

娘 甲。此頃はやうく雪も消えて、世のなかも春めいて来たと思つたに、きのふあたりから又返つて来たやうでござるな。

娘 乙。一日あたゝかいと思へば、また一日寒くなるがこゝらの習、まだぐ油断はなるまいぞ。ましてこのやうに海が暴れては、なん時どんな時化にならうも知れぬ。今のうちに早う拾ひあつめて置かうか。

小 磯。(三人は流れ木をあつめてゐる。家の内より十蔵の娘小磯、十七八歳、同じこしらへにて出づ。)

娘 甲。おゝ、皆さん、よく精が出ることでござんすの。梅もさくらも一時に咲く奥州の果では、此頃やうく春めいたれど、遠い都では花も散つて、雁もおほかたは歸り盡したでござんせう。わたしの家でもそろそろ雁風呂の支度にかゝりませうか。

娘 乙。わたしの家ではゆうべからも雁風呂を焚きましたぞ。

娘 丙。私のところでは今夜から焚くつもりぢや。おまへも早う来て拾うたがよいぞや。

小 磯。あい、あい。

(小磯も浪打際に出でて、おなじく流れ木を拾ふ。外ヶ濱の十蔵、厚志を着て竹笠をかぶり、網と權とを持ち出て出づ。)

小 磯。おゝ、父さん。いま戻られたか。

十 蔵。けふは朝から沖へ出たが、なにをいふにも海が暴れるので、雷魚一尾網には這入らぬ。それでも剛情に今まで辛抱してゐたが、だんぐ浪は高くなつて来るばかり、所詮駄目だと思切をつけて、これこの通り、空網で歸つて来た。

小 磯。ほんに海が暴れて来たので、わたしも先刻から案じてゐました。

娘 甲。(十蔵は笠をぬぐ。小磯は網や權をうけ取つて片附ける。浪の音いよゝ高し。)

十 蔵。きのふ今日は天気もよし、陸にはそよとの風もないに、どうして沖がこのやうに暴れるのでござらうな。

十 蔵。年のゆかぬお前等は知るまいが、これが昔からいふ津輕の丹後波であらうよ。

小 磯。丹後波とは何ういふことでござんすえ。

十 蔵。(十蔵は竹縁に腰をかける。皆々あつまりて聴く。)

十 蔵。この津輕の守神は岩木山神社、あの御社にはどなたが祭つてあると思ふな。

小磯、そりや知れたことぢや。對王丸と安壽姫様であらうが……。

十藏、その對王と安壽さまは、遠い都路にさまようて、丹後の國の三莊太夫といふ悪人の手にかかり、可哀やお二人ともに果敢ない御最期を遂げられた。その怨みが今も残つて、この津輕の土地へ丹後の人がひとりでも這入つて來ると、たちまち神のいかりに觸れて、海は俄に暴れるのだ。さう云ふ祟があるによつて、この外ヶ濱で時ならぬ時化があると、村役人がきびしく詮議して、丹後の旅人を見つけ出すが最後、すぐに繩付きにして國境まで送り出すのが習……丹後波のいはれは大略かうだ。

(皆々顔を見あはせる。)

小磯、なるほど人の恨みはおそろしいものでござんすな。そんなら今日の沖暴れも、もしや丹後

の人とやらが……。

娘三人、入り込んだのであるまいか。

十藏、この外ヶ濱から蝦夷へかけては、冬のうちこそ雪や風で海も暴れるが、春先のあたゝかい頃に向へば、沖は穏かになる筈だに、けさから俄に浪の高いのは、こりや唯事ではあるまいよ。

(云ふ中に、海はいよゝゝ鳴る。みなゝゝ打案しながら海を見る。向ふより貞任の家來岩手五郎、髪をたれ、胡服、大小、履にて出づ。)

五郎、お。沖が大分暴れるやうぢやの。

十藏、御覽の通りでござりまする。

五郎、天に雲なく、地に風なきに、海のみしきりに暴れ立つは、これぞ聞きおよぶ丹後波であらう。京奥州のたゝかひは、九年このかた結んで解けず、たがひに睨み合つて日を送る折柄、あるひは、京方の間者などが、妾をかへて入込みしにはあらざるか。其方共も心をつけ、怪しき旅人と見るならば、すぐにわれゝまで注進せよ。

十藏、心得ましてござりまする。

五郎、殿をはじめ御一門の方々が、けふは善知鳥神社に御参詣の筈なれば、なほゝ路次の固めが大事ぢや。くどくも申すやうなれど、胡亂の者と見ばかならず油断すな。よいか。

小磯、はい、かならず御注進申上げまする。

五郎、む。 (沖を見る。あさゆふ見馴れし海ながら、暴るゝけしきは寝まじいものぢやなう。

(五郎は上手に去る。皆々あとを見送る。)

貞任 宗任

十藏

この分では今夜も漁は休みであらう。どれ、奥へ行つて横にでもならうか。ながれ木を拾つたら、晩には雁風呂焚いてあたゝまらうぞ。

(十藏は内に入る。小磯は娘等と共にながれ木を細にてたばれてゐる。向ふより金賣小次郎、實は丹後小次郎時兼、廿二三歳。裁付、草鞋にて包を背負ひ、笠を持ち出て出づ。)

ちと物を問ひたうござるが、善知鳥のお社へはどう参つたらようござらうな。
(皆々小次郎をじろく見る。)

小磯。

娘甲。

小次郎。

娘乙。

小磯。

善知鳥のお社へまゐられるなら。(上手を指して。)この濱つたひに眞直にお出でなされませ。物云ひなら風俗なら、こゝらの人ではなさうな。お前はどこから來なされた。詞は國の手形とやらで、隠しても隠されぬもの。推量の通り我等は奥州のものではござらぬ。都に生れて旅から旅をめぐりあるく金賣商人、この土地へは始めて参つたのでござる。なるほど都の生れと云ふだけあつて、こゝらの濱育ちの荒くれた男にくらべては、松と柳ほどの違ひがある。なう、小磯どの。
ほんにわたしの處でも、けふから雁風呂を焚かうと思つてゐたところぢや。お前も先をいそがずば、一風呂浴びて行きなされぬか。

小次郎。

奥州の外ヶ濱では、毎年雁の歸るころに、濱邊の流れ木をあつめて風呂を焚き、死んだ雁の供養のために、旅の人に施しの湯をするとか聞いてゐるが、雁風呂とはそのことでござるかな。

小磯。

お、よう知つてぢや。その雁風呂を沸かすあひだ、まあ、まあ、こゝに休んで行きなされ。

娘甲。

そんなら私等も手傳うて、これから風呂を焚きませう。

小次郎。

供養の爲とあるなれば、一風呂浴びて行きたいところなれど、我等はすこしく行手を急げば……。

小磯。

はて、忙しない。郷に入つたら郷にしたがへ。この濱へ來て、雁風呂を断ると云ふがあるものか。些とのあひだぢや、まあこゝに待つてゐなされ。

(小磯は無理に小次郎の手を取つて、縁に腰をかけさせる。)

娘乙。

さあ、ちつとも早く裏へ行つて。

娘丙。

風呂の支度にかゝらうか。

小磯。

かならず逃けてはなりませぬぞ。

娘甲。逃けると雁が……。

三人。崇るぞや。

小次郎。(小磯を先に、みなくは家のうしろに入る。)

思はぬところに引き止められて、いたづらに時を移した。女どもが風呂を焚きに行つた間に、早くこゝを立去らうか。

(小次郎は草鞋の紐をむすび直す。上手より先刻の岩手五郎出で、この家のまへを過ぎんとし、小次郎に目をつけて又立ち戻る。)

五郎。其方は何者で、いづ方へまゐるぞ。

小次郎。(丁寧に會釋する。)わたくしは旅の商人、これから善知鳥のお社へ參詣いたします。

五郎。おゝ、左様か。(じろくを見る。)兎もかくも詮議の筋がある。それがしと一緒にまゐれ。

小次郎。なんの御詮議かは存じませぬが、わたくしは少しく急ぎの者でござりますれば、どうぞ御免を……。

五郎。待て、待て。おのれ逃るほど猶怪しい。もし尋常にまゐらば、繩打つて引立つるぞ。覺悟せい。

小次郎。これは又迷惑千萬。決してお縄をうくるやうな、胡亂な者ではござりませぬ。

五郎。胡亂でなくば素直にあゆめ。拒むはますく怪しい證據ぢや。さあ、立て。

(五郎は無理に引立てんとす。向ふより貞任の妹松山、十七八歳。侍女ひとり連れて出づ。)

松山。五郎、その者は……。

五郎。おゝ、姫君……。今朝より俄に海の暴るゝは心得ず、丹後のものが入込みしにはあらざるかと、窃に目をつけて居りましたところ、果して斯様な奴……。おそらく敵の間者でござりませう。

松山。なに、敵の間者であると……。

五郎。敵は都から攻め下りし者、丹波丹後の武士も多いに相違ござらぬ。その丹後の奴が忍び入つたによつて、たちまち神のいかりに觸れたのかと存じます。

松山。丹後のものが入込めば、海はたちまち暴るゝと聞く。とは云へ、廣き外ヶ濱に路ゆく旅の人も多からうに、それが果して丹後の者、また果して敵の間者とは、なんぞ確とした證據でもあるかの。

五郎。別に證據もござらねど、兎にかくに怪しき奴なれば……。

貞任 宗任

松山。

(松山はこの中、小次郎をつくづく打守る。)

證據もないに手ごめの詮議は、ちと粗忽ではあるまいか。これ、その者。云ひとつく術もあるならば、早う身のあかりを立てたがよいぞ。

小次郎。

はあ、ありがたいお詞。敵方でないといふ證據は、これ御覽くださりませ。

(懐中より赤き符を出す。符は短冊を三つ切りにしたるくらゐの紙にて、これに判が据ゑてあり。松山は手に取りて見る。)

松山。

五郎、これを見や。白きは源氏、あかきは味方の割符ぢや。

五郎。

む。して、この割符はどこで貰うた。

小次郎。

一の關を越えます時、きびしき御詮議を受けまして、いよく疑ひない者ときまつた折に、これさへあれば外ヶ濱まで通行差支へは無いとのことと、この割符を下されました。

松山。

この通り、味方の割符を持つてゐるからは、もはや疑ひはあるまいが……。

五郎。

なにさまなう。(少しかんがへて小次郎にむかひ。かやうな證據のあるからは、詮議におよばぬ。勝手にゆけ。)

小次郎。

はあ。

五郎。

善知鳥神社御参拜の用意も整うたれば、それがしは殿のお迎ひにまゐる途中、これにて御免ください。

松山。

妾は一足先へまゐつて、お待ち申してをると兄上に申してくりやれ。

五郎。

はあ。

(五郎は去る。松山は侍女にむかひて云ふ。)

松山。

そなたも一足さきにお社へまゐつて、妾はすぐに御参詣いたすと、神職その他にも傳へてくりやれ。

侍女。

かしこまりました。

(侍女は上手に去る、松山は絶えず小次郎に目をつけ、小次郎も松山に始終眼をつけてゐる。)

小次郎。

わたくしはもうお別れ申します。なにとぞその割符をお返しなされて下さりませ。

松山。

いや、返すまい。このまゝには返されぬ。

小次郎。

それがなうてはこの先にも、又どのやうな疑ひを受けようも知れませぬ。わたくしに取つては大事の品、どうぞお戻しく下さりませ。

(摺り寄れば、松山は無言にて頭をふる。)

貞任宗任

小次郎。

おなぶりなされますな。もし、お願ひでござりまする。

(小次郎は思はず松山の袂をとらへて曳く。)

松山。

なぜそのやうなことをする。都は知らず陸奥では、男が女子の袖をひくは、戀をかなへよと云ふ謎ぢやぞ。

小次郎。

え。

松山。

引かれた袂をはらはぬは、女子の方でも嬉しい返事……。

小次郎。

え。

松山。

文よ歌よで戀をする、優しい都の上臈と、みちのくの果の女子とは、心も違へば戀も違ふぞ。ひと目みて懐しいと思つたら、それがすぐに戀となる。それを知つてか知らずにか、袖をひいたがそなたの不肖ぢや。袂の糸はほころびても、縁の糸は繋がつた。

小次郎。

(いよ／＼摺りよる。)眞實にわたくしを……。

松山。

いつはりならぬ證據には、今宵の戌の刻を合圖に、常光寺の門前まで忍んで來やれ。かならず逢はうぞ。

小次郎。

とは云へ、もしや人目の邪魔があつては……。

松山。

(松山は腰にはさみし袋入りの笛をとり出して見せる。)

これは蘆の葉でまいたる笛、陸奥では、こさといふ。妾がこれを吹くならば、妨げのないといふ知らせと思や。

小次郎。

では、その笛の音を合圖に……。

松山。

かならず約束を忘れまいぞ。

(この時、上手より以前の侍女出づ。)

侍女。

神職方でも御用意已にと、のひしました。早うお越しくださりませ。

松山。

お。 (小次郎と顔を見あはせる。) では、これからすぐに参らうぞ。

侍女。

(向ふを見る。) あれ、あれ、向うからもう兄の殿がお見えなされます。

松山。

なに、兄上が……。 (これも向ふを見る。) では、先へまるつてお待ち申さう。

(松山は小次郎を見かへりて、見咎められぬやうにあちらへ行けと眼で知らす。小次郎はうなづきて下手に入る。松山は侍女をつれて上手に歩み去る。家のうしろより小磯をはじめ、娘三人出づ。)

小磯。

思ひもよらぬ邪魔が這入つて、折角わかした湯も水になつた。

娘甲。

ほんに忌々しいことぢやなう。

貞任 宗任

娘乙。これがほんに骨折損ぢや。

娘丙。そんならわたし等はもう歸るぞや。

(三人は流れ木をかへて上手に入る。)

小磯。(ひとり言。)こゝらには珍らしい都の人、無理にもひき止めようと思つてゐたに、横合から

お姫様が……。腹の立つことぢやなう。

(浪の音又きこゆ。)

小磯。どうやら風が寒うなつた。風呂は先づあのまゝにして置いて、圍爐裏に柴でも灸べようか。

(小磯は内に入りて、爐に柴をくべる。向ふより阿部貞任、卅七八歳。髪を襟にたれ、頬より頰へかけて長き髭あり。胡服、太刀、扇。あとより以前の岩手五郎を先に、南部太郎、津輕六郎出づ。)

五郎。三郎どのも追付けあとより参らるゝてござりませう。暫時あれにてお待ち合せなされては如何。

貞任。むゝ。(家のまへに来る。)

太郎。こりや、女。縁さを借りるぞ。

小磯。おゝ、殿様……。(縁より下りて手をつかへる。)むさ苦しいはござりまするが、ゆるくとお

やすみ遊ばしませ。

(貞任は縁に腰をかける。小磯は内に入りて、古びたる鹿の皮をすゝむ。五郎等は地にひざまづく。奥より十蔵出づ。)

十蔵。殿様、かやうな所へお立寄りでは恐れ入ります。存せぬこととお出迎ひもいたさず、

眞平御免くださりませ。

六郎。暫時こゝを借りるまでのことぢや、氣遣ひいたすな。

十蔵。はい、はい。これ、娘。兎もかくも温湯なりと差上げたがよい。

小磯。あい、あい。

(小磯は土瓶の湯を汲む。五郎は海を指さして云ふ。)

五郎。殿、御覽せられい。沖はあのやうに暴れてをりまする。

貞任。浪は遠く蝦夷地より、南にむかつて襲ひくる。海の力はすさまじいものぢや。それに引きかへ我々は、みなみより来る敵に襲はれて、北へ北へと追ひつめられ、かゝる邊土にさまよふ事、思へばく無念の至りぢや。はじめは白河を奪はれ、つゞいて衣川、厨川、次第次第に奪はれて、奥羽二ヶ國に身のおき所もなく、獵人に逐はるゝ獸のやうに、山にかく

貞任 宗任

れ野にひそみて、窺かに時の至るを待つのみ。こゝは日本の外ヶ濱、これより北には逃るべき路もないか。

(貞任は海を望みて悵然。一同もしばらく無言。)

十藏。

憚りながら申上げます。海に向ふには蝦夷といふ大きな島がござりますれば、いざと云ふときには海を越えて、あれへお開きなされませ。都の鬼共もさすがに追掛けてはまゐりまゝまい。

貞任。

けにも憎いは都の鬼ぢや。かれらは我々を夷と呼びて、理も非もわきまへぬ者のやうに云へど、彼等こそ夷に劣りしやからぞ。我々は形こそ荒くれたれ、心は清く正しき者。かれらは形こそ優しく風流びたれ、こゝろは邪にして汚れし者よ。彼等がいたゞく冠とかいふものは、榮華を誇る飾にして、かれらが穿ける沓とかいふものは、弱きものを踏みにじる無慈悲の蹄ぞ。

太郎。

仰せのごとく、彼等は顔形こそ優しけれ、心はおそろしき惡魔の眷族ぢや。われは夷と呼ばるれど、みだりに人の土地を奪ひしことなく、妄りに人の財を掠めしこともござらぬ。

六郎。

然るにかれらは奸智に長けたるまゝ、あるひは力を以て脅し、あるひは慾を以てあざむき、土地も財も思ひのまゝに奪ひ取らんとするは、憎みてもなほ餘りある徒ではござらぬか。

貞任。

さればこそ我も九年このかた、都の鬼をかたきとして、俺までも防ぎ戦ひしが、彼の八幡太郎といふ奴、軍の駈引上手にして、われは次第に打ちすくめられ、滅亡の時節も近づきぬ。最期の際には世をおどろかすほどの働きして、彼等の膽を冷してくれうぞ。

十藏。

それにつきましても、合點の行かぬはこの丹後波、もしや敵の間者などが入込んだのかも知れませぬ。どなたも御用心が肝要でござりまする。

五郎。

それは先刻も申したことで、已に一度怪しき奴を取押へたれど、味方の割符を所持して居つたるゆゑ、兎もかくも放してつかはしたが、今更思へば胡亂の奴ぢや。

十藏。

それはお前様のぬかりと云ふもの、今となつては割符がなんの證據になりませうぞ。味方の死骸のふところから盗み出したかも知れませぬ。

五郎。

なにさまこれは滑落であつた。彼奴、遠くはゆくまい。いで引捕へて今一應の詮議をせねばならぬ。

(五郎は起たんとするを、小磯は遮る。)

小磯。あゝもし、お待ちなされませ。あてども無しに追はうより、あの旅人は今夜の戌の刻に、常光寺の門前へ忍んでくる筈……。

五郎。むゝ、かれは常光寺へ忍んで来るとな。

小磯。お姫様となにやら内証で約束して、こさの音を合圖に忍び逢ふ……。

貞任。(氣色を變へる。)なに、妹が其奴と忍び逢ふと……。して、その相手は何者ぢや。

小磯。都の金寶ぢやと申しました。

貞任。さりとは憎き都の鬼め。わが領土を奪ひ、わが家を奪ひ、なほ飽足らずして、わが妹までも奪はんとするか。やあ、五郎。其奴かならず赦すまいぞ。今宵常光寺にまちうけて有無を云はさず引捕へよ。

五郎。はつ。

(この時上手の方さわがしく、以前の娘三人、あわて、走り出づ。)

娘甲。あれ、あれ、御神馬が一散に走つてくる。

娘乙。蹄にかけられては大變ぢや。

娘丙。早うあつちへ逃げようぞ。

(三人は下手へ逃げて入る。みなく上手を見る。)

太郎。なにさま善知鳥神社の御神馬が、物に狂ひしとおほしく。

六郎。こなたを指して一散に飛んでまわりまする。

(みなく立騒ぐ。向ふより貞任の弟宗任、廿一二歳。おなじく髪を襟に垂れ、胡服履にて出で、こなたをみて足早に走り来る。これと同時に、上手より御幣を負ひたる白馬狂ひ出づ。宗任その前に立ちふさがりて、遂にその口を取りしづむ。上手より宮奴ふたり追ひ来る。)

宮奴甲。おゝ、三郎どの。ありがたうござりました。

宗任。誰にも怪我はなかつたか。

宮奴乙。幸に怪我人もござりませぬ。

宗任。それは重疊。いざお引渡し申すぞ。

宮奴。はつ。

(宮奴等は一禮し、馬を引立て、去る。宗任は家來どもを見かへる。)

宗任。狂ひし馬と見たならば、宗任がまるるまでもなく、其方ども走り向つてなせ止めぬ。人にあやまちあらば何とするぞ。

貞任 宗任

五郎。

恐れ入つてござりまする。さるにても、殿御社參の折も折、神馬が俄かに狂ひ出でしは……

(皆々は顔を見あはせる。)

宗任。

(うち笑む。) いや、馬が狂ふは珍らしからぬことぢや。

(皆々はやはり不安の體にて無言。下手より濱の若者四五人、佞武多の服物を持ち出て出づ。)

十藏。

あゝ、これ。そのやうな物を持出してどうするのだ。

若者甲。

これは佞武多ぢや。

十藏。

佞武多は云はいつでも知つてゐるが、なんで今頃持ち出したのだ。花のさく頃に佞武多でも

あるまい。(貞任等に憚る思入にて。) 止せ。よせ。

若者甲。

それでも今年はくり上げて、是非賑かに催さうと、濱中でも大張込みぢや。

十藏。

いや、いや、それは悪い思案だ。いくさの最中に、まあ、よせ、よせ。

貞任。

(憤りを發して。) その佞武多これへ出せ。

若者。

はあ。

(若者は餘儀なく貞任のまへに佞武多を持ち出す。)

貞任。

知らぬか汝れ等。むかし坂上の田村麿、東國の夷を征伐せし時、夷は山林にかくれて姿を

見せず。よつて俄に謀計をめぐらし、夜に入つて佞武多祭を行ふ。夷はこれを見んとて出で來るところを、四方より圍んで襲殺しにす。その勝いくさを祝ひて、今にいたるまで佞武多祭を催すが、この陸奥の習なり、されど夷がほろぶるといふは、我に取つて甚だ不吉ぞと、先年よりこの祭を差止めたるに、いまや再びこれを催すは、われ／＼に面當か、但しは貞任に亡びよといふ祈か。憎い奴等め。

(貞任はたちまち太刀を抜きて、その佞武多をはたと斬る。若者等は怖れ惑ひて逃げ去る。)

斯うもあらうと思つたゆゑ、わたくしが幾度も意見したに……。

小磯。

ほんに困つた人達でござんす。

宗任。

兄上。この佞武多をなんと御覽せらるゝな。

貞任。

なんと見るとは……。

宗任。

唯今兄上も申されしごとく、佞武多の祭は、都方が夷に勝つたる祝ひ、われ／＼に取つては不吉の祭と、九年このかた差止めたるに、誰が思ひ立ちしともなく、村々擧つてこの祭を催すは、奥州の果までも都の風になびきし證據、われ／＼の運も最早末でござりまするぞ。

貞任 宗任

宗任。

(貞任は黙して答へず。)

敵も味方もたゞかひ疲れて、今や少しく無事なるに似たれど、清原武則、新たに敵に加はりて、人馬をととのへ、兵糧をあつめ、出陣の用意おさく、怠り無しとかうけたまはる。まして相手は軍神とも呼ばるゝ八幡太郎義家。その疾きこと風のごとく、何時不意に押寄せ来らうも知れませぬ。われは防ぐべき人数も少く、守るべき要害もなく、しかも民の心をうしなうては、一家の危急は目のあたりでござりませう。

(貞任は答へず。)

五郎。

三郎どのゝお詞なれど、今更なるとなりませうぞ。

太郎。

敵何萬騎よせ来るとも、われゝ根かぎり戦うて。

六郎。

八幡太郎に一泡ふかして見せ申すわ。

宗任。

われゝ根かぎり戦うたら、一度や二度の勝利はあらう。しかし人の力には限りがある。心は矢竹に違つても、自然の勢には勝たれぬものぢや。

貞任。

(屹となつて。)獅子は傷いても猶、羊を噛む力はある。貞任おとろへたりと雖も、おめくとは仕れまい。何時なりともかゝつて来よ、都の鬼は先づこの通りぞ。(佐武多をふみ破る。)

それ、引裂いて捨てい。

(五郎をはじめ、太郎六郎も立寄つて、佐武多をさんぐに引裂く。宗任はひとり嘆息す。浪の音凄まじくきこゆ。)

幕

第二一幕

(一)

おなじ日の夜。正面に高き鐘樓ありて、そのかたはらに櫻の大樹、花爛漫たり。左右の奥には杉柁などの大樹立てり。

(前幕に出でたる娘三人。ほかに女房小兒等大勢たゝすむ。笛太鼓の音遠くきこゆ。)

娘甲。

あれ、あれ、佐武多の一群がこつちへも練つて来るやうぢや。

娘乙。

魚盡しは濱町の衆であらう。

貞任 宗任

娘 丙。

揃ひも揃つて見事なものぢや。

(皆々わやく云ひながら向ふをみる。笛太鼓の音賑はしく、向ふより濱の者大ぜい、思ひくりに派手なる着物をきて、佞武多なかつぎ、或は笛を吹き、あるひは太鼓をたき、踊り狂ひて出づ。佞武多は成るべく大いなるがよし。先づ二間以上の高さにて、竹を骨にして紙をはり、これに彩色を施し、そのなかには幾本の蠟燭をつけて、一種の萬燈のごときもの。臺には二本の太き青竹をつけ、神輿などを擔ぐやうにして大勢にてかつぐ。こゝは魚盡しなれば一つは鯛、一つは鰻など面白かるべし。やはり榊天王の如く、かつぎながら揉んでゆくと知るべし。)

唄 佞武多流れろ、忠臣は止ッばれ。裁さば裁て、裁せよ。ヤサヤサヤサヨ——。

(みな口々にはやしなから踊り来る。外ヶ濱の十藏、權をもちて走り出で、佞武多のまへに立塞がる。)

十 藏。

え、待て、待て。佞武多祭は九年前からきびしい御法度だぞ。この間からたびく云うて聞かしたにわからぬ奴。お咎めを受けぬうちに、止めろ、やめろ。

(若い者頭の一人すゝみ出づ。)

若 者。

おやぢどの、そのやうには叱らぬものぢや。何年もつゞく軍騒ぎで、どこの浦も大弱り、

十 藏。

天下太平を祈りのために、久しぶりで催したこの祭りぢや。邪魔せず遣らしてください。ならぬ、ならぬ。さつきもその佞武多の張物を御覽なされて、殿様はきつい御立腹であつたぞ。おのれらは面白さうに踊り狂つて、後の祟がおそろしいとは思はぬか。馬鹿な奴め。歸れ、かへれ。

若 者。

たとひ何であらうとも、折角催したこの祭を、途中で今更止められるものか。なう、皆の家。

皆 々。

さうぢや、さうぢや。構はずに遣れ、やれ。

十 藏。

え、どこまでも剛情な奴。おれの意見をきかねえで、無理に通るなら通つてみる。この權一本でその佞武多を片つ端から叩き毀すぞ。

(十藏は權をとり直す。小磯走り出づ。)

小 磯。

あゝ、もし、父さん。日ごろの氣性と云ひながら、血氣盛りのわかい衆達を相手にして、怪我でもしたらなんとなさる。

十 藏。

馬鹿をいへ。年は取つても何十年來、鱈や鯨を相手にして、世をわたつて來た外ヶ濱の十藏だ。多寡が鯛や鯉の小野郎に、網を破られてたまるものか。心配せずに退いてるろ。

貞任 宗任

小磯。それぢやと云つて、相手は大勢、まして今日はお祭で氣もたつてゐる所、さからはぬがよ
うござんすぞ。

十藏。え、まあいゝから黙つてゐろ。

(親子が争ふうちに、こなたの若者等は急ぎ立つ。)

若者。こんな事をしてゐるうちに、又どんな邪魔が入らうも知れぬ。さあ、さあ、早く練出せ、
練出せ。

皆々。さうぢや、さうぢや。

(みなく無理に押通らんとすれば、十藏は小磯のとむるを突き退けて、群集の中へあばれ込み、
櫓を以て佞武多をうち破る。奥より貞任の家來數人出で、かくと見るより十藏に加勢し、みな抜き
連れて群集のなかへ斬込めば、若者共もおどろき騒ぎで四方八方へにげ散る。十藏も家來も思ひ思
ひに追つてゆく。小磯一人はあとに残りて、うろくしてゐる。)

小磯。あゝ、これ、父さん。長追せずともう好いほどに戻つてくだされ。父さん、父さんなう。

(奥より松山は蘆笛を持ち出て出づ。)

松山。そこにあるは小磯でないか。

小磯。お姫様でござりましたか。

松山。表がしきりに騒がしいやうであつたが、何事が起つたのぢや。

小磯。佞武多の若い衆が通らうとするを、わたくしの父が制して喧嘩になり、唯今あつちへ追う
てまゐりました。

松山。おゝ、さうであつたか。どちらにも怪我がなければよいが……。

小磯。それが案じられてなりません。わたくしはこれから跡を慕うて、父の安否を見とゞけてま
ゐります。御免くださりませ。(いそいで行きかゝる。)

松山。待ちや。

小磯。なんぞ御用でござりまするか。

松山。(少しく云ひ淀みて。)晝間海邊に迷うてゐた金賣の商人を、そなたは知つてゐるか。

小磯。はい、知つてをります。

松山。その商人の姿を、今夜こゝらで見はせなんだか。

小磯。いえ、一向に見かけませぬ。(幾分の嫉みまじりて、空嘯く。)

松山。おゝ、よい、よい。早う行きやれ。

貞任 宗任

小磯。はい。

(小磯は心のうちに冷笑ひて去る。)

松山。

今宵も最早や戌の刻、彼の人はずい見えぬか。

(松山はあたりを見まはしてゐる。奥より貞任出づ。)

貞任。

妹は居らぬか。松山、松山。

松山。

お、兄上……。わたくしはこゝにをりまする。

貞任。

それに居つたか。(透し視る。何用あつて、今頃そこらにたゞずんで居るのぢや。

松山。

え。日ごろ好める笛を吹きに出たか。

貞任。

え。笛もよからう。心をすまして徐かに吹け。われも聞かうぞ。

松山。

え。なにも猶豫、早う吹け。

貞任。

(松山は胸をとゞろかして俯向く。)

貞任。

(松山は答へず。木立のあひだより月出づ。)

貞任。

お、月が出た。むかしの人の歌に、こさ吹かば陰りもぞする陸奥の、蝦夷になん見せそ秋の夜の月とある。忍ぶ夜は月があつては便りが悪からうに……。今宵は一入こゝろを入れて、こさの祝曲を吹きすまし、陸奥の月を陰らしてはどうぢや。

(貞任はあざ笑ふ。松山はなほ答へず。)

貞任。

兄がこゝに居つては吹けぬといふか。左もあらう。然らば奥へ行かうほどに、かならず吹けよ。

松山。

え。

貞任。

吹かずば、おのれ赦さぬぞ。

(貞任は叱と云ひすて、奥に入る。)

松山。

兄上が今の口ぶりでは、何事も疾うに御存じの様子。めつたに笛を吹く時は……。

(松山は笛を見て、思案にくれてゐる。風の音して、櫻の花散りかゝる。)

松山。

このまゝ笛を吹かすに於ては、兄上のお叱りをうけるばかりか。約束を違へたいつはり者と、都の人に恨まるゝが何より悲しい。兎てもかくても、吹かねばならぬ笛ならば、いま兄上も云はれた通り、忍ぶには闇こそよけれ、心をこめたる蘆笛の音に、みちのくの月を

貞任 宗任

陰らしてみせうぞ。

(松山は漸く決心し、月にむかつて笛をふく。笛の音にひかれて、木かげより丹後小次郎うかゞひ出づ。)

小次郎。 姫君ではおはさぬか。

松山。 おゝ、そなたは……。晝の約束を違へずに……。

小次郎。 笛の音をたよりに忍んでまるつた。

松山。 忍んで来たは嬉しいが、差當つたる一つの難儀……。これ……。 (耳に口をよせて囁く。)

小次郎。 さては兄の殿に早くも覺られしか。

松山。 何者の注進かは知らねども、隠すことは早くも洩れて、兄上は何事も御存じの様子。さら

でも日ごろから他國者を憎んでござるに、ましてそなたは京の生れとやら。もし見咎められたら、どのやうな難儀にならうも知れまい。あれ、あれ、わしの一心が通じてか、幸ひに月も陰つた。早うこの場を立退いて、身に禍のないやうにして給れ。

この場を早う逃れよとは、おなさけ過ぎて恨めしいお詞。一旦おん身と誓ひしからは、この小次郎、いかなる難儀も厭ひませぬ。

小次郎。

松山。 その志は嬉しいが、見すくそなたの難儀になることを……。 (奥に心を配りつゝ、詞せは

しく。) 兄上はそこらに立聞きして居られうも知れぬに、かういふうちも心が急ぐ。さあ、早う、早う。

(小次郎は猶去りかれて、躊躇する。)

小次郎。 とは云へ、今別れては又再びこの世で逢はれうやら……。逢はれぬやら……。

松山。 この世で逢はれずば未來で逢はう。みちのくの女子の戀は、七生までも變るまいぞ。

(兩人は手を取りて誓ふ。このうちに、月は次第にかくれて暗し。左右の立木のかげより貞任の家來數人うかゞひ出づ。)

家來。 曲者……。

(走りかゝつて小次郎を捕へんとす。小次郎つき退けて、暗がりの亂闘。奥より岩手五郎は家來に松明を持たせて出で、かくと見るより走り寄つて小次郎にくみつき、兩人起きつ轉びつ挑みしが、遂に大勢寄り合つて小次郎をいましむ。)

松山。 あゝ、これ、待つて……。

五郎。 お寄りなざるな。それ、こやつを引立てい。

貞任 宗任

家來。

はつ、立て。

(家來は小次郎を引立て、五郎は先に立ち去る。)

松山。

かういふことにならうも知れぬと、案じ煩うた甲斐もなく、かなしや彼の人は繩目の難儀。わらはもこれから奥へかけ付け、もし萬一のことがあらば、わが身にかへても……。さうぢや。

(松山は屹と思案して、これも奥へ走り入る。)

笛太鼓の音又もやきこえて、武者人形の依武多をかつぎたる若者の一群出で、前のごとくに『依武多ながれる』と囃しながら向ふに去る。宗任、養笠にて出で、依武多のあとを見おくりて、心いよいよ決するところあり。唄の聲遠くきこゆ。)

(11)

地方の豪家を義家の陣所にあてたる體。二重家體にて本縁あり。軒には簾をまき上げたり。正面上手は古代風の床にて、こゝに鎧をかざりたる唐櫃、弓矢を入れたる胡篋などあり。おなじ夜の體にて、燈臺をおく。床につゞいて出入の襖。庭には櫻の立木などあり。

(義家の家來一人、烏帽子、直垂、小手、腰當にて出づ。)

家來。

どなたかお取次おねがひ申す。

(奥より鎌倉権五郎景政、おなじく烏帽子、小手、腰當、腹巻にて出づ。)

景政。

お取次の次第はなんぢや。先手より注進でもまるつたか。

家來。

いや、注進ではござりませぬ。敵方より阿部宗任、大將に見参の上、密々に申入れたき儀ありと申して、唯ひとり罷り越してござりまする。

景政。

なに、宗任がまるつたと……。して、かれ一人、ほかにはつゞく人数もないか。

家來。

養笠の忍び姿にて、ほかには誰も召連れませぬ。

景政。

む、合點のゆかぬことぢやなう。(かんがへてゐる。)

(奥より八幡太郎義家、廿二歳、引立烏帽子、小手、腰當、腹巻にて、小姓に太刀を持せて出づ。)

義家。

宗任がまるつたと申すか。なにかは知らぬが對面せう。これへ呼べ。

家來。

はつ。

(家來は引返して去る。奥より家來二三人いで、敷皮をしき、曲録をおく。義家はしづかに坐に着

景政。

貞任、宗任兄弟は、世にきこえたる奥州のあら夷。今や勢ひちままりて、身の置所なきま
まに、詞をかまへて大將に近づき、隙をうかひて刺し違へんなどと巧まうも知れませぬ。
かならず御油断なされますな。

義家。

（打笑む。）野山にすむ猛き獸も、人が狎せば狎るゝものぢや。かれは暴き夷。心を以てわれ
に向ふとも、われは優しき誠心を以て、やがて彼を歸伏さしてみせうぞ。宗任がみづから
來りしは勿怪の幸ひぢや。たとひ夷とは申せども、かれも人に知られし者、唯今これへま
ゐるとも、尋常に式代して、かならず無禮を加ふるな。

景政。

心得ましてござりまする。

宗任。

（向ふより最前の家來は手松明を點して先にたち、あとより宗任は蓑笠を小脇にかゝへて出づ。）
大將の御前、苦しうござらぬ。すぐさまこれへ……。

義家。

はつ。然らば御免ください。縁の下に蓑笠を置きてひざまづく。

宗任。

いや、いや。そこでは話がならぬ。これへ、これへ。

宗任。

このまゝ御前へ出づるは憚りあり。これは暫時おあづかりください。腰につけたる太刀を解

きて、家來に渡さんとす。

義家。

その遠慮は無用。大將と大將の見参ぢや。太刀はそのまま身に着けたがよいぞ。

宗任。

恐れ入つてござりまする。

（宗任は太刀をつけて縁にのぼる。義家は左右を見かへる。）

義家。

めづらしきお客來ぢや。酒肴の用意いたせ。又、この席には権五郎一人、他はすべて次へ

立て。

家來。

はつ。
（家來は一禮して去る。小姓も太刀を刀掛にかけて、みなく奥に入る。）

義家。

さて、宗任。ようぞ参られたの。予は義家ぢや。

宗任。

戰場にては屢々見参いたしたれど、親しくお目通りつかまつるは今宵が初度、それがしは

阿部貞任の弟、同苗三郎宗任。

景政。

それがしは鎌倉権五郎景政、お見知り置きください。

（皆々式のごとくに式代す。）

義家。

數ふれば九年このかた、敵味方と隔てたりし宗任が、何故に今宵ひそかにまるられた。

貞任 宗任

宗任。

その仔細を申上ぐる前に、先づそれがしより承はりたきは、先年來度々の合戦、遂にこの外ヶ濱に向つておん旗をすゝめられしは、飽までも貞任兄弟をうち亡ぼさでは止まぬとの思召でござりませうか。

義家。

それを今更問ふことか。義家はもとより戦ひを好まず、其方どもにも歸順せよと、幾たびか説き諭したれど、かたくなにして肯かざれば、已むなく今日まで軍をつゞけて、奥州の果までも攻め下りし次第ぢや。其方共になんの恨みがあらう。

宗任。

しからば唯今にても、我々歸服いたしますれば……。

景政。

いや、そりやなるまい。もし順逆の道理を知らば、初めに於てなぜ降参いたさぬぞ。今となつてはもう遅い。味方は用意十分に整うて、こよひ戌の刻を合圖に、總攻めと相成る筈ぢや。

義家。

權五郎、控へい。いかにも總攻めの手筈は已に整うたれど、其方兄弟果して歸服するとあらば、罪をゆるして軍をやめう。どうぢや宗任、前非を悔いたか。

宗任。

京都の諸軍勢を引受けて、けふまで敵對いたせしは、國を護るため、家を護るため、敢て悪事とも存じませぬ。したがつて悔ゆべき罪もござりませぬが、つらく世のありさまを

義家。

見まするに、夷と呼ばるゝわれ共が、奥州の片隅に別天地をつくり、何人の支配をも受けずに世を送らうとは、むかしは知らず、今の世には逆もく及ばぬこととござりまする。虎は兎を食ひ、鯨は鯛をのむ。小さくして弱きものが、大きくして強き者にほろほさるゝは自然の道理。都の風にふき拂はれては、奥州の草も木もたまりませぬ。

みなみは筑紫、北は陸奥の果までも、都の風は次第に吹き入るのぢや。これは自然の勢ひで、人間の力のふせぎ得るところでない。其方共も早くその理を悟らば、前後九年のたゝかひに無用の血を流さいでも濟みたるに……。今にして悟るは遅けれども、終りまで悟らぬよりは遙かに優しぢや。奥州のあら夷と世に嘲けられんよりも、おなじく王化にうるほひて、都の人と肩をならべよ。

宗任。

仰せの趣き逐一相分りましてござりまする。われ共愚昧にして天下の勢ひを知らず、飽までも一方に割據して、我ひとり尊しとのみ存じてをりましたるは、生涯のあやまりと今日つくづく悟りました。ついでに兜をぬぎ弓を捨て、降人となつて出でたる宗任、御法通りに願ひまする。

義家。

すでに志をあらためて、歸服いたすと申すからは、其方ども兄弟の命は、義家の軍功に

貞任 宗任

かへても、かならず助けて遣はさうぞ。又、出羽奥州の二ヶ國のうちにて、然るべき所領をも乞ひうけて取らすほどに、再びむかしの夷心を出すなよ、よいか。

宗任。はつ。重々のおん情、骨身にしみて忝けなう存じまする。

義家。多年戦場で睨み合つた其方と、かやうに打解けて物語りするは、めでたいことぢや。義家も満足に思ふぞ。

宗任。はつ。

（この時、奥より家來は銚子、三寶、肴など持ち出で、義家のまへに列べて、一禮して去る。）

義家。予は先刻から少しく酒を過してゐるが、かさねて一獻酌まうぞ。権五郎、酌に立て。

景政。はつ。

（景政は進み出で、まづ義家に酌をする。義家は土器を飲みほして、宗任にさす。）

義家。宗任、受けてくりやれ。

景政。無骨ながら、それがしお酌つかまつる。

宗任。ありがたうござりまする。

（宗任も土器を受け、景政の酌にてのむ。）

義家。〔快げに。〕其方は當年なん歳に相成るぞ。

宗任。三十一歳でござりまする。

義家。然らば義家よりも九つばかりの兄ぢやな。さすがは奥州にきこえし者ほどあつて、武勇はなかく、逞しいものぢや。先年鳥の海のたゝかひには、其方に烈しく追はれたよなう。

宗任。その砌はひどい吹雪でござりました。

義家。さうぢや。人馬の足も立たぬほどの大雪のなかを、其方は三方から包んで追うてくる。味方は次第に打ち散らされて、剩すところは僅かに六騎と相成つた。思へば危いことであつたよ。

宗任。残念な儀でござりました。

（宗任、感慨に堪へず。義家は打笑む。）

義家。残念とは、義家をうち洩したと云ふことか。あの砌に其方に追ひ討たれたら、今宵の對面は出来まいものを、はゝゝゝゝ。〔土器をさす。〕

宗任。〔土器をうける。〕お前さまには弓矢神の冥助がござりまする。人の力では逆もかなひませぬ。〔嘆息す。〕

貞任 宗任

(蝶の音きこゆ。)

景政。 おゝ、もはや出陣の合圖とみえまするが……。

義家。 なにさま最早や出陣の時刻……、義家存する旨あれば、出陣は今しばらく猶豫せよと、其方まるつて觸れわたせ。

景政。 心得ましてござりまする。御免……。

(景政は起つて奥に入る。)

(義家は起つて奥に入る。)

義家。 先刻権五郎も申した通り、こよひ戌の刻を合圖に、不意に押寄する手筈であつたが、其方すでに歸服する上はいくさは無用ぢや。但しこれには兄貞任も同意かな。

宗任。 今宵推参いたせしは宗任の一存、兄の心中はいまだ確めてはまるりませぬ。

義家。 萬一兄が不同意と申しても、其方に異變はあるまいな。

宗任。 仰せまでもござりませぬ。

義家。 しからば其方これより立歸つて、貞任にも篤と理解を申しきかせ、共々歸服するやう取りはからへ。今より一晌のあひだに有無の返答なくば、貞任不得心とみて攻めかゝるぞ。

宗任。 はつ。

義家。 其方も定めて心急ぎであらう。馬を貸してつかはす間、鞭をくれて走せかへれ。(奥に向ひて。誰そあるか。)

(はつと答へて、家來一人出づ。)

義家。 宗任に貸してつかはすのぢや。予が乗りかへの馬に鞍置かせよ。

家來。 はつ。(引返して去る。)

宗任。 なにから何までお心づかひ、恐れ入つてござりまする。

義家。 馬の用意の整ふまで、どうぢや、もう一盞かさねぬか。義家は元來下戸の上に、今宵は先刻から重ねて杯をすこして、痛く酔を催した。宗任、ゆるせよ。(曲録に倚りてうとくと

なる。)

宗任。 それがしは歸りをいそぎますれば、最早これにてお暇申しまする。

(義家は答へなし。)

宗任。 折角こゝろよう假寝してござるを、お起し申すも却つて無禮……。このまゝすぐに戻らう

か。

宗任。 貞任宗任

貞任宗任

宗任。

(宗任は義家にむかつて一體して庭に降り、蓑を着て二足三足ゆきかける。風の音、櫻の花ちる。宗任立ちどまりて、いつその隙を見て義家を殺さうかとかんがへ、一旦思ひ直して行きかけしがまた立ちどまりて思案の末、遂に思ひ切つて蓑をぬぎ、縁のさきまで戻る。)

宗任はお暇申しまするぞ。殿……。八幡どの。

(宗任はあたりを見かへりながら呼ぶ。義家答へず。宗任いよく決心して、太刀をぬき、忍び足に縁にのぼりて、義家の傍へうかゞひ寄る。義家は矢はり正體なし。宗任切りかけんとしてかゝり得ず。やがて又心をひるがへして、ひざまづく。)

宗任。

一旦降伏を誓ひながら、刹那のあひだに敵意を起すは、われながら浅ましき夷心……。殿、おわび申しまする。

(宗任は刀を鞘に納め、ふたゝび蓑をきて、足早に去る。奥より鎌倉権五郎出づ。)

景政。

仰せにしたがひて、出陣はしばらく延引と觸れ渡しました。おゝ、寢てござるさうな。殿……。殿……。

(景政は近づきて大きく呼ぶ。義家は眼をひらく。)

義家。

おゝ、左様か。よい、よい。

(義家は又うとくとなる。景政はあたりの銚子など片附ける。)

幕

第三幕

白木の勾欄つきの二重屋體。左右も折廻はして勾欄つきの板縁、三方に翠簾を垂れ、中央に白木の階段あり。すべて善知鳥神社拜殿の體なり。社の左右には杉の大樹おひ茂れり。前幕とおなじ夜。

(社殿には貞任と、其子千代童(十歳)いづれも白衣をつけて坐し、神前に祈る。宮奴二人、庭さきの篝火に柴をくべてゐる。夜深うして、浪の音遠くきこゆ。宮奴は柴をくべをはりて去る。岩手五郎は先にたち、家來數人は丹後小次郎をいまして引立て出づ。)

五郎。

殿、仰せにしたがひて曲者をかやうに召捕つてござりまする。

貞任。

曲者といふは其奴か。面をみせい。
(小次郎應したる體もなく、頭をあげて貞任を吃とみる。)

貞任。

さてくおのれは憎い奴な。妾は商人にやつせども、まさしく敵の間者であらうが……。

貞任 宗任

つゝます申せ。

小次郎。今となつては卑快につゝみ隠すまい。いかにも我は源氏の家來、丹後小次郎時兼。金うりの商人と姿をかへて、この外ヶ濱に入り込みしは、敵の機密を探らうためぞ。

貞任。その機密を探らうために、色に事寄せてわが妹をあざむき、今宵常光寺で忍び逢ひしな。大事の役を仕損じて、かく捕はれたる不肖の身、敵味方のあざけりは是非なけれど、色に事寄せて清き乙女をあざむき、おのが功名の餌とする卑怯者と云はれては、小次郎の一分たゝす。最期の懺悔ぢや、よう聞かれい。今日外ヶ濱邊にて、はからず逢うたる乙女は、おん身の妹と知りながらも、たぐひなき容色に心をうばはれ、我にもあらで戀に落ちた。

小次郎。なんの汝がまことの戀か。妹をあざむく手だてであらうが……。

貞任。手だてなれば命を惜まう。戀なればこそ危きをわすれて、笛の音による秋の鹿、おぞくも獵人の良にかゝりしは、一期の不覺、末代の恥辱。小次郎の戀のいつはりならぬは、方々推量あれ。

小次郎。たとひ偽りならずとも、姫君をそゝのかすなどとは重々憎い奴。殿、這奴を如何やうにお捌きなされまするな。

五郎。さらでも赦しがたき敵の間者、おもき處刑に行ふべし。貞任が神前にぬかつきて、怨敵調伏の祈誓をこむる折柄に、其奴を捕へしは勿怪の幸ひ、焼き殺して神への贄にさゝけよ。心得申した。それ、用意いたせ。

貞任。はつ。

五郎。はつ。

家來。はつ。

小次郎。もとより命は亡きものと覺悟の上ぞ。火に焼くとも水に沈むるとも、心まかせに計らはれよ。唯この期に及んで一言いふことあり。都の大軍遠からず寄せ來らんに、お身達いつまでか無用のたゝかひを續くるぞ。一日も早く心をあらためて降伏せられい。

貞任。それをおのれに習はうか。年ごろ我々を苦めたる仇の片割れ、神の火に焼かれて地獄に墮ちよ。

松山。あゝ、もし、しばらく……。罪の本はこの松山、どうでもお仕置とあるならば、どうぞあなたの身代りに、わらはを殺して下さりませ。さあ、五郎。小次郎殿の繩をといて、妾をその木に繋いでたもれ。

貞任 宗任

（松山走り出で、かくと見るより聲をあげる。）

（松山走り出で、かくと見るより聲をあげる。）

貞任 宗任

貞任 宗任

貞任 宗任

貞任 宗任

貞任 宗任

貞任 宗任

五郎。

え、これはまた途方もないことを……。お身様、氣でも狂はれたか。

松山。

大事の男がこの有様をみて、氣の狂はぬ女子があらうか。もし、兄上、松山が一生に一度のお願ひでござりまする。神への贅にはこの身をさへけて、小次郎どの、お命ばかりは、もし……。 (手をあはせる。)

貞任。

云ふな、云ふな。おのれにも罪はあれど、赦しておくは兄の情ぞ。かたきの命乞ひなど及ばぬことぢや。不義のむくいは靦面、おのれの男の焼かるゝを、それに控へて見物せい。いえ、いえ、それが見てゐられうか。いつそ我身が先へ……。

松山。

(松山は懐劍をぬきて、わが胸元を突かんとす。五郎走りよつて支へ、その刃物をうばひ取る。松山は泣き伏す。)

貞任。

それ、早う柴を持て。

(はつと答へて家來どもは柴を澤山に運び來り、小次郎のまへに積みかされる。松山いよく悲みてかけ寄らんとするを、五郎は押へて動かさず。小次郎は眼をこぼして覺悟の體なりしが、この時しづかに見かへる。)

小次郎。

松山どの。かく成りゆくは天命、悔むには及ばぬことぞ。敵味方とは隔たれども、小次郎

松山。

の戀の偽りならぬは、よう覺えてゐてくだされよ。

貞任。

偽りならぬ戀ゆゑに、わらはも共に……。 (又寄らうとするを、五郎押へる。)

家來。

はつ。

(家來篝火の火を取りて、枯れ柴につけんとなす。松山は身も世もあられず泣き狂ふ。)

松山。

あれ、あれ、この世からなる地獄の責……。あまりと云へばおそろしい。

貞任。

お、おそろしからう。女の涙でその火は消せぬぞ。(あざ笑ふ。)

(火は柴に燃え移る。)

松山。

お、小次郎どの……。あれ、あれ、火焰が……。あれ……。あれ……。

(松山は狂ひ叫びつゝ、氣をうしなひて倒る。)

貞任。

火の勢ひがぬるう見ゆるぞ。隙間なく柴を焚け。

(家來は更に柴を加へんとする時、宗任走り出で、かくと見るより一人の家來が持つたる矛をうばひ取り、逆手に持ちて、燃えたる柴をかき散らし、踏み消す。)

宗任。

日ごろは都の人を鬼と呼べど、生きながらに人を焼くなど、これぞまことに鬼の所行。

貞任 宗任

兄上、なんとしたことでござるぞ。

貞任。そやつを焼き殺して、贅にさゝぐるのぢや。

宗任。神にさゝぐる生贄には、鳥あり獸あり、いかでか人を……。(云ひつゝ小次郎の繩を解く)

五郎。(詰るやうに)三郎どのには其奴の繩目をおゆるしなされるか。

宗任。赦したるは仔細あり、それは先づあとの事……。 (小次郎にむかひ)小次郎どのとやら、兄

に代りて、それがしが赦す。疾くくこゝを立去られい。

小次郎。敵の間者をこのまゝゆるすか。

宗任。危き命を救はしれは、お身の武運の盡きざるところぢや。兎かう云はずに早う行かれい。

小次郎。なにさま人の運は不思議なものぢや。死ぬるも生くるもおのが心のまゝにもなるまい。さ

らば一旦はおわかれ申すぞ。

(小次郎は倒れたる松山を見かへりて躊躇ひしが、人の見る前、思ひ切つてゆきかゝる。浪の音高

くきいゆ。)

小次郎。おゝ浪の音が高うなつた。丹後の人がこの地に足を容るれば、海は俄に暴るゝと聞く。夜

ふけて浪のいよく暴るゝは、丹波丹後の京勢が次第にこゝへ押寄すると覺えしぞ。いか

に貞任。先刻も申せしごとく、都の大軍は三方よりよせ來りて、お身達はもはや袋の鼠ぢや。今の間に篤と分別せられい。

(小次郎は云ひすてゝ去る。)

宗任。(家來に)妹は氣を失うたとみゆるぞ。別當所へ扶けゆき、介抱いたせ。

家來。はつ。

(家來二人は松山をかゝへて去る。)

五郎。さるにても合點の行かぬは、なにゆるゑに敵の間者を、おめくお赦しなされましたか。そ

の仔細うけたまはりたう存じまするか……。

宗任。不審は一應もつともぢやが、彼はもはや敵ではない。

五郎。え。

貞任。なに、彼が敵でないとは……。武勇一邊のわれとは違つて、日ごろより分別者ときこゆる

宗任、かれを放ちかへせしも定めて仔細ある事と、最前よりその爲すがまゝに黙して居つ

たが、敵を敵にあらずとは近ごろ不思議の口上、仔細を申せ、仔細をいへ。

宗任。おたづねなくとも宗任の意見、逐一申上けうと存じてをりました。五郎もうけたまはれ。

貞任 宗任

宗任は思ふ旨あつて、今宵かぎり降参と決心したした。

貞任。

や、降参とは……。扱はかたむく運を見かぎり、いよく降参と決心したか。

(貞任は五郎と顔を見あはせて思案す。社殿の奥より縁づたひにて、貞任の母真弓、六十歳。貞任の妻山の井、三十歳。うち連れて出づ。)

真弓。

こりや、宗任。思ひもよらぬことを聞くものぞ。今更かたきに降参などとは、都の鬼がそれほどに怖ろしいか。

山の井。

よし又かたきが怖ろしくとも、親を捨て、兄を捨て、一門郎等をふり捨て、わが身ばかりが生きようとは、どの口で云はるゝぞ。

真弓。

呆れ果てたる不覺者ぢやなう。

宗任。

親を捨て、兄をすて、一身の無事をねがふなどとは、憚りながら思召違ひ、宗任は一家一門を救はうと思へばこそ、いよく降伏と決心して、ひそかに義家の陣所へ立越え、わが所存を逐一申述べたるところ、義家こゝろよく承引して、貞任兄弟矛をふせ、尋常に歸服するに於ては、すみやかに朝敵の名を削り、陸奥出羽二ヶ國のうちにて、相當の所領をもあたふべしと申されたり。されば、今に於て軍をやむるが、家のため、身の爲……。

真弓。

いや、いや、口賢う申しても、命を惜む卑怯のこゝろは、この母にありくと見えすいて居るぞよ。まさかの時には親子兄弟、一家一門、枕をならべて潔よく討死するが、まことの武士の覺悟と知らぬか。

山の井。

奥州一の名家たる、阿部の一族ともあるべき者が、今更おめくとかたきに仕へ、甲斐なき命ながらふるは、死ぬにもましたる恥辱でござりませうぞ。

五郎。

まことに方々の仰せのごとく、今となつて降参などとは、無念とも心外とも申さうやうはござりませぬ。して、お身様には、いつ義家に對面せられた。

宗任。

今夜の宵のほどぢや。

五郎。

大將と大將との見参は、願うてもなき幸ひ、なぜ其時に隙をみて義家と刺し違へはなされぬぞ。

宗任。

さればその事ぢや。われも中ごろに心變りて、幸ひあたりにも無し、親のかたき、家の仇、おのれ義家一討と、ひそかに太刀に手をかけたが……義家は快く酔うて眠つてをる。

真弓。

それ、その隙をなぜ討たぬのぢや。

宗任。

討つは固より易けれども、一旦降伏ときはまりし上は、宗任に敵意はあらまじと、飽まで

貞任 宗任

もわれを信じてうたがはぬ義家、その油断に付入つて、不意に刃を向くるなどとはわれながら恥かしき夷心と、一念俄かに發起して、いよく降伏の臍をかため、唯今これへ立戻つてござりまする。就ては兄上。源氏は今宵の戌の刻を以て總攻めの用意整ひしを、それがし云ひのべて一响の猶豫を乞ひ、早馬にて引返したる次第でござれば、今が生死存亡のわかる、大事の境、時おくれは悔んでも甲斐なし。こゝ半响がわれくの命ぞ。たゞちに進退の御分別然るべう存じ申す。

(貞任は最前より黙して聴きおたりして、悲憤の涙を左右に拂つていふ。)

貞任。この期に及んでなんの分別……。貞任は奥州の夷ぢや。みやこの鬼の家來眷族とはなるまい。今あらためて云ふまでもなければ、われくは先祖の古よりこゝに住みて、家をつくり、田を耕し、無事に幾百年を送り來つた。しかるに都の藤原とかいふ奴、勢ひをたのんで年毎にわが領土をうばひ、夷などと卑しき名をつけて、罪なきわれくを飽までも虐けんとす。正しき道理より云へば、かれらこそまことに天下の賊ぢや。悲しいかな、われに智慧少く力たらず、かれは智慧に富みて力多し、道理も非理にまけられて、次第次第にわが勢ひ盡き、いまや日本の果まで追ひつめられて、遂にこゝに亡びんとするは、まことに天命とあきらむるのほかはあるまい。

宗任。

然らば兄上は最後まで……。

貞任。

おゝ、最後の一人となるまでも、戦つて死ぬるぞ。

(宗任は嘆息す。)

貞任。

(更に聲を和らげる。)
貞任の決心は今いふ通りぢや。但し人にはおのく心あり、おなじ血をうけし兄弟とて、意見の相違は是非もない。止まらんとする者はとまり、去らんとするものは去り、思ひくの道をゆかうぞ。多年むつみし兄弟も、今別れては又逢はれまい。心ばかりの名残のさかづき……。五郎、用意いたせ。

五郎。

はあ。

(五郎は縁にのぼりて正面の翠簾をまく。正面の奥は神前のこゝろにて、鏡、幣束など式のごとく供へありて、こゝにも翠簾が半ば垂れたり。)

眞弓。

おなじ腹をかりたる子ながら、兄は健氣に討死の覺

山の井。

わが夫を褒むるではなけれども、兄は兄だけに生れまさつた天晴れ武士。

眞弓。

貞任こそは、ほんに我子ぢや。

貞任 宗任

(このあひだに、五郎は翠簾をまき終る。)

五郎。火急の場合おさかづきの用意とても整ひませぬが、神前の神酒では如何ござりませうな。それよからう。神の御前ぢや。神酒が却つて相應しいかも知れぬぞ。土器、三寶とりそろへてこれへ持て。

(五郎は神前より三寶に乗せたる神酒と土器をさげ来る。貞任は起つて、おなじく神前に供へたる唐櫃より一領の黄革の鎧をとりいだし、正面に据ゑる。)

貞任。

これは父阿部大夫頼時公が、鳥海にて御最期のみぎり、身につけられたる形見の鎧、唐櫃に入れて當社に納めおきしが、今この場合、假にこれを父上と見たてまつり、御尊靈の見そなはず前において、兄弟こゝろよく別れを告げうぞ。

宗任。

はゝあ。

(兄弟は相對して坐し、五郎は先づ土器に神酒をつぎて、三寶に乗せたるまゝ、鎧のまへに置く。兄弟は鎧の前に手をつく。)

貞任。

父上尊靈も聞しめせ。九年うちつゞく戦に、貞任宗任一致して、力のかぎり防ぎしが、運つたなうして勢ひ縮まり、大敵俄かに押寄せ、一族こゝにほろびんとす。

宗任。

この時にあたりて兄弟心を異にし、兄は戦はんといひ、弟は降らんと云ひ、おもひくに進退を定むるも、まことに己むを得ざる次第。

貞任。

戦ふ者にも道理あり。

宗任。

降るものにも理なきにあらず。

貞任。

たがひに異なる道をゆきて。

宗任。

兄弟相別るゝ事の仔細を。

貞任。

あらためて父上に。

二人。

告げたてまつる。

(兩人はつゝしんで禮拜す。五郎は三寶を把りて貞任のまへに置く。貞任は酌をさせて飲む。)

貞任。

宗任、堅固で暮せ。

宗任。

はつ。

(宗任は兄の杯をうける。五郎は酌をする。)

貞任。

今より敵味方と隔たるとも、兄弟一家の好み、貞任討たれしときくならば、亡きあとの供養をたのむぞ。

貞任 宗任

宗任。

仰せまでもござりませぬ。最期を清う遊ばされい。

(南部太郎、津輕六郎、その他の家來十數人は、弓または矛を持ち出て。)

太郎。

先刻よりあれに差控へて、委細は逐一うけたまはりました。

六郎。

今に及んで降参とは、三郎どの。

皆々。

御卑怯でござらうぞ。

(みな口々にいふ。宗任は徐かに見かへる。)

宗任。

卑怯とはなにかが卑怯……。宗任果して卑怯ならば、われ一人ぬけ出して降参せうぞ。方々のある前にて、わが存する旨をつます申し述べ、さて其上にて進退を決するに、なんのうしろ暗いことがあらう。亡びんとするものは、止まりて兄と共にほろびよ。生きんとする者は、去つてわれと共に生きよ。今が運の定まるところぞ。

太郎。

われは兄の殿と生死は一つぢや。

六郎。

おめく降参は仕つるまい。

(この時、遠寄せの聲、微かにひびくに、皆々耳をかたむけて、屹と向ふを見る。小磯走り出づ。)

小磯。

皆様、それにお出でなされましたか。敵は忍びくに陣をすゝめ、不意にこなたへ押寄せ

貞任。

て來るとのこととござりまする。早う御用意を遊ばしませ。

む。敵はいよく寄せたるな、母上をはじめ女子どもは、一先づ常光寺に立退きて、再度の注進を相待たれよ。家來どもは兎もかくも走せ向つて、防ぎ矢射よ。われもやがて續かうぞ。

家來。

は、あ。

(五郎をはじめ、太郎、六郎その他の家來は走り去る。遠寄せきこゆ。)

貞任。

阿部貞任が最後の物具……。む。

(貞任は彼の鎧を引つかへて、奥へ走り入らんとす。宗任は思はずその鎧に取付く。)

宗任。

兄上……。今一度御分別を……。

貞任。

え、未練ぢや。

(貞任はふり放して、縁づたひに奥へ走り入る。遠寄せの音次第に近づく。)

小磯。

あれ、あれ、敵は次第に近寄つてまゐりまする。ちつとも早うお寺へお越しなされませ。わたくしもお供いたしまする。

貞任。

敵の大軍不意に寄せたとあるからは、おそらく勝軍の望みもあるまい。

貞任 宗任

山の井、一先づ常光寺に立退いて、心しづかに注進を相待ちませうか。

(千代童すゝみ出づ。)

千代童、母様、わたくしも父上と一緒に、軍に行きたうござりまする。

山の井、おゝ、よう云うた。今宵の軍はそなたの初陣、父上と御一緒にかけ向つて、花々しい働きをさせうぞ。

眞弓、ほんにそなたは天晴れの覺悟。さすがは貞任の子ほどある。これ、宗任。奥州の侍の子

は、八つや九つの幼いものでも、これほど健氣なことを云ふぞよ。山の井、來やれ。

山の井、はい。小磯とやらも、庭つたひで奥へ來や。

小磯、かしこまりました。

(眞弓は千代童の手をひき、山の井もつゞいて縁づたひに奥に入る。小磯は庭づたひに奥に入る。遠寄せいよく烈し。宗任は起ちあがりて縁先に出づ。)

宗任、

遠くは八甲田の麓より、田茂木野、夜須の森のあたりまで、寄手は已にみち／＼たりと覺ゆるぞ。海をこえて蝦夷地へ渡らば知らず、陸にありては最早や袋のねすみも同様、兄上いかにも猛くとも、最後の勝利はおほつかなし。宗任一人を除くのほか、阿部の一家も今

宵かぎり、ことごとく亡ぶる運と定まつたか。

(宗任は悵然嘆息す。松山は髪ふり亂して出づ。)

松山、

おゝ、兄上……。

宗任、

おゝ、妹。小次郎は無事に落した。安心せい。

松山、

ありがたうござりまする。(思はず地にひざまづく。)して、母上や姉上は……。

宗任、

いづれも常光寺へ立退かれた。たゞし宗任一人は、これより寄手の陣所へゆく。そちも一

緒にまるらぬか。小次郎にも逢はれうぞ。

松山、

逢ひたいは山々なれど……。(思案して。)母上や姉上をふり捨て、妾ひとり敵へゆくの

は……。

宗任、

嫌ぢやといふか。

松山、

どうも心が済みませぬ。

(松山は泣く。宗任は憫れむがごとくに寂しく打笑む。)

宗任、

さて、女子は心弱いものなう。(縁を降りて行きかゝる。)

松山、

あゝ、もし、妾はこれより常光寺へまるつて、みな様と生死を共にする覺悟。それにつけ

貞任 宗任

て一つのお願ひ……。しばらくお待ちくださりませ。(懐劍をぬきてわが黒髪を切り、懐紙につゝむ。)末の松山浪越して、誓ひし事も仇となる……。陸奥の女子の戀のかたみぢやと、小次郎どのお傳へくされ。

宗任。(髪をうけ取る。)形見の黒髪は、宗任たしかに預かつた。小次郎に逢うたらば、かならず手渡しせうぞ。

松山。これで思ひ残すこともござりませぬ。兄上、もうお別れ申します。(見かへりつゝ去る。)兄上をはじめ一門の人々は、飽までも都の人をかたきとして、最後まで一つ道をゆく。妹は戀の道をゆく。西へ行き、東へゆくも、人に依てみな異り。われは我がゆくべき道をゆかうぞ。

宗任。(遠寄せ烈しくきこゆ。宗任、黒髪をふところにし、悠然として去る。やがて向ふより貞任、大童にて鎧に矢を折りかけ、片手に太刀をぬき持ち、千代童を小脇にかへて走り出づ。千代童も鎧に矢を負うたり。)

貞任。(千代童を拜殿の縁におろす。)千代童、傷は浅いぞ。心をたしかに持て。千代童……。千代童。(千代童は已に息たえて正體なし。貞任は狂氣のごとく、千代童の身に立ちたる矢をひき抜きて折

貞任。つて捨て、扶け起す。)

これ、千代童。父はこゝに居るぞ。眼をひらいて父の顔をよく見よ。これ、千代童……。もう物も云はれぬか。千代童……。

(さまざまに呼び活かせども、やはり正體無し。貞任は千代童を轟とかき抱きて、わが顔を千代童の頬にませ、涙をばら〜と流す。)

貞任。恨みかさなる都の鬼めが、わが國を奪ひ、わが家を奪ひ、果はわが子までも奪ひしよ。(敵を睨みて無念の牙をかみ、また我子にむかひて。)をさなき者が冥土のひとり旅、心ほそしと思ふなよ。父も母もやがてあとより行かうぞ。道に迷はず待つてをれ。

(浪の音高きこゆ。外ヶ濱の十藏走り出づ。)

十藏。殿様……。残念なことござりました。十藏か。貞任も運つきで斯くの通りぢや。一旦の勝負は時の御運、そのやうにお氣の弱いことを仰せられますな。晝間も申上げました通り、たとひ日本中を追ひつめられても、海の外にはまだ〜大きい廣い國がござりまする。ちつとも早うこゝをお開きあつて、蝦夷地へお越しなされませ。わたくしがお船

貞任 宗任

の用意はいたしまする。

貞任。

奥州は祖先の墳墓の地、こゝを去つていづこへ行かう。奥州に生れたる貞任は、奥州に死するが本意ぞ。ついでには其方に頼むことあり。母上をはじめ、妻も、妹も、先刻より常光寺に立退き、さだめてわが便りを待ちわびて居らう。其方これより走せ付けて、いくさも最早やこれまでなり、いづれも覺悟せよと申傳へよ。

十藏。

して、お覺悟とは。

貞任。

知れたことを……。一同自害ぢや。貞任手づから介錯すべきなれど、一人の子を失うてさ

十藏。

へ……。 (千代童の死骸を見て) 腸もちぎるゝばかりに覺ゆるに、かさねて母や妻の死目を見

十藏。

見るは……。貞任の忍びぬところぞ。十藏、察してくりやれ。

貞任。

仰せ御もつともござりまする。では、これからお寺へまるつて、皆様方に御最期をおす

貞任。

すめ申し、その御様子を見とゞけて、又あらためてお知せにまゐりませう。

貞任。

御最期は母上よりはじめて、次第に妻や妹にいたるが習。一人が自害する毎に、寺の鐘を

十藏。

つきて知らせよ。

十藏。

かしこまりました。では、始めの鐘が鳴りましたら、おふくろ様の御最期と思召せ。

貞任。

次の鐘は妻の最期。

十藏。

又その次は妹御様。

貞任。

三度の鐘を聞き終つて、貞任もしづかに自害せうぞ。かならず合圖を忘るゝな。

十藏。

鐘の音をお聞き外しなされますな。

貞任。

おゝ、早うゆけ。

十藏。

はあ。

五郎。

(十藏引返して去る。貞任は縁に腰をおろして、鎧をぬぐ。岩手五郎は手負にて走り出づ。)

貞任。

殿……。これに御座ありしか、なにを申すも敵は大軍、しかも不意に押寄せて、三方四方

貞任。

を取切つたれば、駆け破るべき隙間もなく、矢種のこらす射盡して、我々もはや斯くの

貞任。

通り……。殿にも御用意遊ばしませ。(鎧を外す) 恐れながら冥土のおん路しるべ、御免：

貞任。

……。 (わが脇腹に太刀をつき立て、倒る。)

貞任。

右には家來……。左にはわが子……。次第次第にほろびて行くわ。やがては鐘もきこゆるで

貞任。

あらう。

(やがて第一の鐘きこゆ。)

貞任 宗任

貞任。 おゝ、第一の鐘が鳴つた。母上は今が御最期……。

(貞任はかなたを望みて拜す。しばらくして第二の鐘きこゆ。)

貞任。 第二の鐘は妻の命……。

(木かげより丹後小次郎、前とは變りて烏帽子、鎧、長巻を持ちてうかどひ出づ。)

小次郎。 おゝ、貞任……。望む相手ぞ、勝負……。 (つめ寄る。)

(貞任は身がまへして、その顔を透しみる。)

貞任。 むゝ、おのれは先刻放ちやりし丹後小次郎、貞任の首所望とあらば取らしもせうが、先づ

待て。

小次郎。 待てとは卑怯……。いざ参るぞ。

貞任。 燥るな、小次郎。耳をすまして今鳴る鐘を聞け。おのれの戀人が最期の知らせぞ。

小次郎。 なに、戀人が……。最期の知らせと……。

貞任。 戀をうち破る無常の鐘、地獄の底から響いて來ようぞ。

(小次郎おどろく。第二の鐘きこゆ。)

小次郎。 おゝ、あの鐘が……。 (思はず土にどうと坐す。)たとひ火水の中なりとも、女の命だけは救ひ出

さんと、心をくだきし甲斐もなく、もはや最期を遂けたるか。

(小次郎は失望して茫然たり。南部太郎、津輕六郎は矛を持ちて走り出づ。)

太郎。 (小次郎をみて。) それ。

(二人は左右より矛をむける。小次郎は頭を垂れたるまゝ、答へず。)

貞任。 やあ待て、兩人。彼ひとり討つたればとて、今となりては何かせん。一門ごとく亡び

つくして、貞任最期の時いたれり。なんぢ等その矛を以て、右左より我を突け。

(二人は顔を見合はせる。)

太郎。 仰せではござれども、重代相恩の御主君……。

六郎。 家來が矛を向くるなどは以ての外、この儀ばかりは眞平御免くださりませ。

貞任。 遠慮も辭退も時によるぞ。主の指圖ぢや。兎かう申さず、唯だこれを突け。かならず臆す

な。(左右の脇を指示す。)

二人。 (是非なく)はゝあ。(矛をかまへる。)

貞任。 やあ、小次郎。わが首はおのれに取らすぞ。うち取つて手柄にせい。

小次郎。 さすがは貞任、世に勇ましき最期ぞ。小次郎介錯して、大將の實驗に入れ申さう。心しづ

貞任 宗任

かに生害あれ。

(十藏と小磯走り出づ。)

殿様……どなたも見事に御自害なされました。

小磯

貞任

二人

お前様までがこのお姿は……。悲しいことでござります。お、貞任も今死ぬるぞ。(家來を見かへり。いざや兩人御免)

貞任

(二人は左右より矛を向けて、その脇つばを突く。折柄ぐわうぐたる浪の音は社殿も震ふばかりにきこゆ。貞任は矛を左右にかい込みて、叫ぶ。)

折しも海はいよく怒つて、岸をくだく丹後波は、天地もくづるよばかりにきこゆるぞ。貞任今やこゝにほろびて、陸奥の土はみやこの鬼に奪はるよとも、海は限りなき力を以て、千年の後までもかたきを呪へ。

幕

番町皿屋敷

大正五年一月作。

大正五年二月。本郷座初演。

初演當時の主なる役割——青山播磨（市川左團次）柴田十太夫（市川左升）權次（市川荒次郎）權六（市川米左衛門）お菊（市川松萬）お仙（市川米藏）眞弓（市川市十郎）放駒四郎兵衛（市川壽美藏）など。

登場人物——青山播磨。用人柴田十太夫。奴權次、權六。青山の腰元お菊、お仙、澁川の後室眞弓、放駒四郎兵衛、並木の長吉、橋場の仁助、聖天の萬藏。田町の彌作、ほかに若黨、陸尺、茶屋の娘など。

(一)

麴町、山王下。正面はたかき石段にて、上には左右に石の駒寄せ、石燈籠などあり。櫻の立木の奥に社殿遠くみゆ。石段の下には櫻の大樹、これに沿うて上のかたに葎葉張の茶店あり。店さきに床几二脚をおく。明曆の初年、三月なかばの午後。
（幡隨院長兵衛の子分並木の長吉、橋場の仁助は床几に腰をかけてゐる。茶店の娘は茶を出してゐる。宮神樂の音きこゆ。）

娘。

お茶一つおあがりなされませ。

希町皿屋敷

長吉。櫻も今が丁盛盛りだね。

娘。こゝ四五日のところが見頃でござります。それに當年はいつもよりも取分けて見事に咲きました。

長吉。山王の櫻といへば、おれたちが生れねえ先からの名物だ。山の手で櫻と云やあ先づこゝが一番だらうな。

仁助。それだから俺達もわざ／＼下町から登つて来たのだ。それで無けりやああんまり用のねえところだ。

長吉。これ、神様の前で勿體ねえことを云ふな。山王様の罰があたるぞ。

仁助。山王様だつて怖えものか。おれには観音様が附いてゐるのだ。

娘。お背中にぢやあございませんか。(笑ふ)

仁助。やい、やい、こん畜生。ふざけたことを云やあがるな。

長吉。まあ、靜かにしろ。どうせ姐さんに褒められる柄ぢやあねえや。は／＼／＼／＼。ほ／＼、とんだ粗相を申しました。

(ふたりは茶をのんでゐる。石段の上より青山播磨、廿五歳、七百石の旗本。あみ笠、羽織、袴)

あとより権次・権六の二人、いづれも奴にて附添ひ出づ。)

播磨。櫻はよく咲いたな。

権次。まるで作り物のやうでござりまする。

権六。たなばたの赤い色紙を引裂いて、そこらへ一度に吹き付けたら、斯うもあらうかと思はれまする。

権次。はて、むづかしいことを云ふ奴ぢや。それより一口に、祭禮の軒飾りのやうぢやと云へ。

は／＼／＼／＼。

(三人は笑ひながら石段を降りる。)

娘。お休みなされませ。

(三人は上の方の床几にかゝる。長吉と仁助は見てさゝやき合ふ。娘は茶を汲んで三人に出す。)

長吉。おい、ねえさん。こつちへももう一杯呉んねえ。

娘。はい、はい。(茶を汲んで来る。)

長吉。(飲まうとしてわざと顔をしかめる。)こりやあ熱くつて飲めねえや。

(長吉はわざとその茶を播磨の前にぶちまける。)

權次。

やあ、こいつ無禮な奴。なんで我等のまへに茶をぶちまけた。

權六。

かう見たところが粗相でない。おのれ等、喧嘩を賣らうとするのか。

長吉。

賣らうが賣るめえがこつちの勝手だ。買ひたくなけりやあ買はねえまでだ。

仁助。

一文奴の出る幕ぢやあねえ、引込んでるろ。こつちは手前達を相手にするんぢやあねえや。

播磨。

然らば身どもが相手と申すか。(笠を取る)仔細もなしに喧嘩を賣る、おのれ等のやうな

らずものが八百八町にはびこればこそ、公方様お膝元が騒がしいのぢや。

(この以前より放駒の四郎兵衛、町奴のこしらへにて子分二人をつれ、石段を降り來り、中途に立ちて窺ひみたりしが、この時すつと前に出る。)

四郎兵衛

仔細もなしに咬み付くやうな、そんな病犬は江戸にやあるねえや。白柄組とか名を付けて、

町人どもを嚇してあるく、水野十野左衛門が仲間のお侍、青山播磨様と仰しやるのはたし

かあなたでござえましたね。

萬藏。

さうだ、さうだ。この正月に山村座のまへで、水野と喧嘩をしたときに、たしかに見かけ

た侍だ。

彌作。

違えねえ。坂田の何とかいふ奴と一緒になつて、その白柄をひねくり廻したのを、俺あち

やんと覚えてるんだ。

(長吉と仁助は床几をゆづり、四郎兵衛はまん中に腰をかける。)

播磨。

む。白柄組の一人と知つて喧嘩を賣るからは、さてはおのれは花川戸の幡隨院長兵衛が

手下の者か。

四郎兵衛。

お察しの通り、幡隨院長兵衛の身内でも、ちつとは知られた放駒の四郎兵衛。

長吉。

並木の長吉。

仁助。

橋場の仁助。

萬藏。

聖天の萬藏。

彌作。

田町の彌作だ。

權次。

やい、やい。こいつら素町人の分際で、歴々の御旗本衆に楯突かうとは、身のほど知らぬ

蚊とんほめ等。それほど喧嘩が賣りたくば、殿様におねだり申すまでもなく、云値でおれ

達が買つてやるわ。

權六。

幸ひ今日は主親の命日といふでも無し、殺生するにはあつらへ向きぢや。下町から蛻くつ

て来た上り鰻、山の手奴が引つ攔んで、片つばしから溜池の泥に埋めるからさう思へ。

四郎兵衛。そんな嚇しを怖がつて、尻尾をまいて逃けるほどなら、白柄組が巢を組んでる此の山の手へのほつて来て、わざ／＼喧嘩を賣りやあしねえ。こつちを溜池へぶち込む前に、そつちが山王の括り猿、御子供衆のお土産にならねえやうに覺悟をしなせえ。

播磨。われ／＼が頭とたのむ水野殿に敵意を挟んで、とかくに無禮をはたらく幡隨院長兵衛、いつかは懲してくれんと存じて居つたに、その子分といふおのれ等が、わざと喧嘩を挑むからは、もはや容赦は相成らぬ。望みの通り青山播磨が直々に相手になつてくるゝわ。

四郎兵衛。いゝ覺悟だ。お逃げなさるな。
播磨。なにを馬鹿な。

子分四人。えゝ、休めちまへ、休めちまへ。

(播磨も權次權六も身がまへする。四郎兵衛、その他四人も身繕ひして詰めよる。娘はうろ／＼してゐる。この時、陸尺に女の乗物をかゝせ、若黨二人附添ひて走らせ來り、喧嘩のまん中へ乗物をおろす。)

長吉。おい、おい。お前達も目さきが利かねえ。

仁助。こゝへそんなものを卸してどうするんだ。

二人。退いてくれ、退いてくれ。

(權次權六は若黨の顔を見ておどろく。)

權次。おゝ、こなたは小石川の。

權六。澁川様の御乗物か。

(乗物の戸をあけて澁川の後室眞弓、五十餘歳、襦袢すがたにて出づ。)

播磨。おゝ、小石川の伯母上、どうしてこゝへ……。

眞弓。赤坂の菩提所へ佛參のかへり路、よいところへ來合せました。天下の御旗本ともあるべき者が、町人どもを相手にして、達引とか達入とか、毎日毎日の喧嘩沙汰、さりとは見あけ

た心掛ぢや。不斷からあれほど云うて聞かしてゐる伯母の意見も、そなたといふ暴れ馬の

耳には念佛さうな。主が主なら家來までが見習うて、權次、權六、そち達も惡あがきが過

ぎませうぞ。

權次。あい、あい。(頭を押へてうづくまる。)

權六。

四郎兵衛。見れば御大家の後室様、喧嘩のまん中へお越しなされて、このお捌きをお付けなさる思召

番町皿屋敷

真弓。でござりまするか。御見物ならもう少しおあとへお退り下さりませ。差出た申分は知りませぬが、この喧嘩はわたしに預けてはくださりませぬか。播磨はあとで厳しう叱ります。まあ堪忍して引いてくだされ。

四郎兵衛。さあ、(思案する。)

長吉。でも、このまゝで手を引いては、

仁助。親分に云譯があるめえぜ。

萬藏。今更あとへ引かれるものか。

彌作。かうなるからは命の取遣りだ。

四人。かまはずに遣つちまへ、遣つちまへ。

真弓。不承知とあればわたしがお相手。

四郎兵衛。え。

真弓。それとも素直に引いてくださるか。

四郎兵衛。こりやあ困りましたね。いくら御武家にしたところが、女を相手に町奴がまさかに喧嘩もなりますまい。喧嘩は元より出たとこ勝負、けふに限つたことでもござりませぬ。おまへ

様のおあつかひに免じて、こゝは素直に歸りませう。長吉も仁助も蟲をこらへろ。よう聞き分けて下された。そんならこゝはおとなしう。

四郎兵衛。どうも失禮をいたしました。もし、白柄組のお侍。いづれ又どこかで逢ひませうぜ。(長吉

仁助等に。) 今聞く通りだ。さあ、みんな早く来い、来い。

長吉。あい、あい。

真弓。(四郎兵衛は先にたちて、長吉と仁助と子分二人は去る。)

これ、播磨。こゝは往來ぢや。詳しいことは屋敷へ来た折に云ひませうが、武士たるものが町奴とかの真似をして、白柄組の神祇組のと、名を聞くさへも苦々しい。喧嘩がなんでも面白からう。喧嘩商賣は今日かぎり思ひ切り切らねばなりませんぞ。

播磨。はあ。

真弓。きかねば伯母は勘當ぢや。わかりましたか。

播磨。はあ。

真弓。それ。

(真弓は眼で知らずれば、陸尺は乗物を昇きよせる。真弓は乗物に乗りしが、再び首を出す。)